

雑誌『精神分析』における高橋鐵の活動

櫻庭太一

○はじめに—本稿資料の内容と目的—

たかはしてつ
高橋鐵門下で彼の評伝『性の伝道者 高橋鐵』を著した鈴木敏文は、同書で高橋の巷間指摘されることの多い「生臭さ、人間臭さ」に触れ、弟子故の盲信ゆえではないと断りつつも、高橋の活動を「独自の精神分析的性学を駆使して、性解放・性啓蒙運動の先頭に立ち、これらを弾圧しようとする権力および似非道德家たちと闘った不撓不屈の戦士であった。」(同書 P.13)と総括している。性文化研究者として昭和20年代から30年代にかけて一世を風靡し、後には自身が発行した『生心りレポート』等のわいせつ性をめぐる裁判を闘ったことでも著名な作家・高橋鐵については、鈴木が指摘するような戦後の活動に比して、戦前における活動実態がこれまであまり注目されてこなかった。

今日残る高橋自身の回顧記録やエッセイ、また周囲の人物による言及等でも「性文化研究者」としての履歴と業績が第一に掲げられ、上記鈴木との総括にもあるように、あたかも彼が生まれながらにしてそうした道を歩む事が定まっていた、性文化・性研究の“鬼”であり、その啓蒙のために戦い抜いた反骨の士であるかのように振り返られることが多い。

もちろん、高橋の代表作である『あるす・あまとりあ』(昭和24年)をはじめとした著書群、そして前掲の裁判の過程などを見れば、彼の人生の大半がすなわち「日本人の性」をテーマとした研究とそれに伴う批判や軋轢との戦いに費やされたことは事実であり、鈴木が指摘するような役割を高橋が演じ、そして果たしたことも(その評価は様々であるにせよ)確かであろう。

しかし、こうした「性の闘士・高橋鐵」像の背後に隠れるように、高橋が発行に執筆活動を行い、人脈を広げた時期がある。それが戦前、特に本稿で取り上げる『精神分析』そして東京精神分析学研究所に参加していた時期の高橋鐵である。

彼および周囲の人物によって書かれた記録の多くでは、高橋の戦前のキャリア、ことに昭和8年末の入会以降10年以上にわたり執筆者として、また会員として活発な活動を行った東京精神分析学研究所時代とその前後について触れたものは、戦後の華々しい活躍、そして高橋の自伝的コラムや、小説である『ある阿呆の人性』に描写された青少年時代と比較して少なく、あたかも彼の「空白期」であるかのようにも見える。その一方で、高橋は東京精神分析学研究所時代に学びそして研究を進めたと思われるフロイト精神分析学を看板に掲げて戦後の世に出、また同研究所時代に受賞した「フロイド賞」を自らの肩書きから終生外すことがなかった。つまり、今日知られる高橋鐵の形成がはじまった重要な時期の一つであるにも関わらず、その実際があまり知られていないのである。

高橋はいかなる人物としてその時期を過ごし、どのようなキャリアの経緯、研究の変遷を経て、今日謂われるところの「性文化研究の大家」へと至ったのであろうか。

本稿資料はそれを探るための手がかりとして、高橋が昭和8年末から所属した東京精神分析学研究所の機関誌『精神分析』誌上における彼の発表作品や同研究所での活動に焦点をあてた。すなわち『精神分析』創刊号から雑誌統制により廃刊となる昭和16年4月号までの誌面をもとに、同誌掲載記事中の高橋鐵の作品・発言および本人に関する記述を網羅的にまとめて資料化し、そこに若干の考察と付記を加えたものである。

全体を6節に分け、まず第1節では高橋鐵その人の履歴と活動の概要について触れ、第2節では『精神分析』の書誌と、その刊行元となった東京精神分析学研究所および主宰者・大槻憲二の概要についてまとめた。その上で、第3節では『精神分析』内で高橋鐵が発表した論文、コラム等文章作品のタイトルおよび各作品の梗概を紹介し、高橋が具体的にどのような作品を同誌において発表したのかを見ていく。また第4節では、高橋が東京精神分析学研究所の活動において特に頻繁に参加していた「研究会」および「講習会」（その概要については第2節で触れる）の各回内容と開催日時、場所、そして高橋の発言や発表内容といったデータをまとめ、彼が東京精神分析学研究所に入会して以降、

どの程度研究会、講習会に参加しどのような発言を行ったのかが一覧できるようにした。第5節では第3節および4節には含まれない、『精神分析』誌上における高橋鐵についての言及（他会員による作品批評や、記事での挙名など）を本文と表とでまとめ、第6節にて本稿全体の総括と位置づけをおこなっている。

本稿資料で取り上げるのはむろん高橋鐵の“全体像”ではなく、あくまで「戦前の一時期における高橋の一側面」のデータではあるが、本稿資料を手がかりとして高橋鐵の戦前～戦中における活動の一端を概観するとともに、今後の筆者が目標とする現代の性表象と文学の研究する際の、また性文化研究史における高橋鐵の位置づけを再検討する際の一材料としたい。

○本稿の出典

東京精神分析学研究所機関誌『精神分析』昭和8年5月号（創刊号）～昭和16年4月号（戦前における終刊号）。なお、本稿資料中の表作成および引用は、同誌の復刻版である『精神分析《戦前編》』全12巻（不二出版、平成20年）を使用した。

第1節 高橋鐵の履歴と活動概要

まず、高橋鐵の生涯およびその活動の概要について触れておこう。

高橋鐵は、明治40年に東京市芝区愛宕下町（現在の東京都港区新橋）でラシャ問屋および証券取引業（高橋曰く“株屋”）の父・清三郎と、元新橋芸妓の母・てふの長男として出生している。父親による命名は「鐵之介」だったが、手違いがあったものか戸籍名は「鐵次郎」とされた^(※1)。なお、彼は後の昭和28年に家庭裁判所の手続きを経て、長らく筆名および通称として使用し続けた「鐵」に正式改名している。

幼少期から思春期の頃までは父親の事業が成功していたこともあって富裕な環境下で育つが、大正12年の関東大震災で高橋家は家財および事業店舗を焼失^(※2)し、経済的な苦境に立たされることになった。18歳で私立錦城商業学

校（現在の錦城学園高等学校）を卒業後、日本大学予科に入学して心理学を学び、それと並行しながらカルピス株式会社の宣伝部でアルバイトを行う等、若い頃から広告業界との関わりを深くした。また同時期に社会主義活動に参加していたこと、労農党の代議士で性科学に関する研究所・啓蒙書を多く著していた山本宣治に私淑していたことを複数の著作で記している。24歳で日大の本科を卒業した後、東京精神分析学研究所を主催していた在野の研究者・文芸評論家の大槻憲二に師事し、フロイト精神分析学の知識を吸収しつつ、本稿の中心題材となる雑誌『精神分析』誌上で論文や研究発表等を活発に行っている。この東京精神分析学研究所および大槻憲二、また『精神分析』の概要については次節にて詳しく述べたい。

また昭和12年前後からそれらの研究活動と並行して中外製薬やトンボ鉛筆の広告スタッフとして勤務し、かつ松竹キネマのシナリオライターや、作家として雑誌『オール読物』・『新青年』などでコラム記事や短編小説を発表するなど、ジャンルを問わない多様な活動を行うようになっていく。さらに昭和15年から戦時中入ると、大政翼賛会の囑託として「精勤本部」に勤務していたとされる^(※3)が、この時期については本人および周囲のわずかな証言があるのみで、高橋が大政翼賛界内部で実際にどのような業務に携っていたか、またどのような活動実態があったのかは現時点で詳らかでなく、今後の調査課題としたい。

敗戦後は、戦前から生活調査・研究団体として組織していた「日本生活心理学会」を性研究を主眼とした団体として再発足させ、会員向けに『性科学界機関誌（共学資料）』を刊行するなど、性研究を本格的に展開しはじめる。一方で、昭和21年の東京精神分析学研究所退所^(※4)など大槻との関係がこの時期に変化しはじめ、最終的に昭和23年7月、高橋は前掲『性科学界機関誌』上に「狂つた大槻憲二氏へ」と題する“絶縁文”を掲載し、大槻と袂を分かつこととなった^(※5)。

そして昭和24年に出版した『あるす・あまとりあ—性交態位62型の分析』（久保書店の別名義であるあまとりあ社発行）の大ヒットで一躍その名を全国的なものとした。また同作のヒットを受け昭和26年に刊行された性風俗研究

誌『あまとりあ』（同）には、企画・執筆の両面で大きく関わり、世間一般では『あまとりあ』＝高橋鐵主宰の雑誌と“誤認”されるほど^(※6)の活躍ぶりを示すようになる。高橋の性科学、性風俗関連の著作のほとんどは、日本生活心理学会の会員アンケートを元にしたとされる多数の事例や古今の古典及び図画（特に江戸期の春画）と、川柳やバレ句を引用した平易な解説の組み合わせという一般読者を強く意識したものであり、同時に彼が終生のテーマとした「性の解放・啓蒙」を全面に押し出したものであった。一方で、その内容については厳密な医学的知識や資料考証の厳密性に欠ける点も多く指摘されており、かつアカデミズムへの批判と自らの研究、見識の優越と画期性を強く訴えるクセの強い文体^(※7)は、生前から高橋の評価を肯否二分していた。

ともあれ、これらの活動により高橋は昭和20年代～30年代にかけて「性科学の大家」として、また「セックス・カウンセラー」のさきがけとして様々なメディアにその名を登場させることとなり、自身の主宰する日本生活心理学会を拠点として、性を扱った古今の資料・文献の紹介を行った。

また、これらの活動とともに高橋の名を世上に知らしめたのが、昭和29年の猥褻図書販売・頒布容疑での摘発、そしてそれに続く14年に及ぶ裁判—いわゆる“高橋性学裁判”—一であろう。これは日本生活心理学会で刊行していた『生心りポート』等での性風俗資料発表、頒布が「猥褻図画販売」にあたるとして摘発され起訴されたもので、この処分を不服とした高橋は地裁、高裁での敗訴、上告棄却にも屈せず最高裁まで自らの正当性を訴え続けるものの、昭和46年に罰金刑が確定した。一方でこの裁判は、法律上の争いこそ高橋の“負け戦”に終わったが、「性の解放を訴え権力と闘う研究者」としての高橋のイメージをより強固なもの^(※8)とし、本稿「はじめに」冒頭でとりあげた鈴木^{アイドカ}の言にみられるように彼が「性解放の闘士」として長く偶像化される要因ともなった。なお、最高裁上告中の昭和44年には、映画『新宿泥棒日記』（大島渚監督／ATG配給）に本人役—主演の横尾忠則とその恋人に対してセックスに関するアドバイスをする性科学者—で出演している。昭和46年5月31日、直腸癌のため北里研究所付属病院にて死去。

主な著書に、前掲『あるす・あまとりあ』（あまとりあ社、昭和24年）、『人

性記』(同、昭和27年)、『高橋鐵コレクション』(展望社、昭和37年)、『あぶ・らぶ』(青友社、昭和41年)などがある。

これら性科学、風俗研究書のほか、『世界神秘郷』(霞ヶ関書房、昭和16年)、『南方夢幻郷』(東栄社、昭和18年)の2冊の短編小説集を出版。また同じく戦前期にはメディア批評紙『現代新聞批判』(現代新聞批判社)や広告情報雑誌『廣告界』(誠文堂新光社)^(※9)にも連載、寄稿するなどジャンルを横断したさまざまな文筆活動を行っている。

【第1節 注記】

- ※1 『新文芸読本 高橋鐵』(河出書房新社、平成5年)掲載の「高橋鐵年譜」(鈴木敏文作成)では、高橋本人は混乱しやすいこの本名を嫌い、中学生のころから「鐵」と自称したとしている(同書P.218)。また、高橋の盟友であった書誌研究者・斉藤夜居は著書『悩まざりし人ありや一評伝 高橋鐵』で、「高橋鐵の本名は「鉄次郎」であるが、親からもらったこの鉄次郎という名をひどく嫌って、戦前からきまりよく「鐵」と自称し、また「鉄」と略字で書かれることもひどく嫌っていた」と証言している。(同書P.28)
- ※2 高橋の門人であった鈴木敏文は、前掲『新文芸読本 高橋鐵』に発表した『性解放の灯を掲げて 高橋鐵小伝』でこの事件が、高橋の「社会思想の開眼」のきっかけになったのではないかと指摘している。(同書P.12)
- ※3 『精神分析』昭和15年9月号に「高橋鐵氏は精動本部の宣傳係員となられた」との記述がある。本稿第5節および6節参照。
- ※4 鈴木敏文『性の伝道者 高橋鐵』(河出書房新社、平成5年)P.366を参照した。同書で鈴木は、高橋の東京精神分析学研究所退所を昭和21年5月としている。
- ※5 鈴木敏文は『性の伝道者 高橋鐵』において、戦後活躍の場を失い生活が困窮していた大槻に対して高橋がある原稿執筆を仲介したところ、それが師を侮辱するものと誤解されて大槻の怒りと不信を買ったことが決

裂の原因であると述べている（同書 P.76～77）。なお本文でとりあげた「狂つた大槻憲二氏へ」（『性科学界機関誌』No.6 掲載、昭和 23 年）で高橋は「リフアイン社へ對し「高橋の編輯はまづいから自分に委せてくれ」とか「高橋は原稿ブローカーだ」とか再三来信され、あまりのあさましさに皆々呆れて居りました」と記しており、この「リフアイン社」がらみの原稿依頼が二人のトラブルのきっかけと見られる。同誌における高橋の言及から、大槻側からの批判・糾弾も公開状の形でなされたと思われるが未見。こちらも今後の調査課題としたい。

- ※ 6 時に誤解されることがあるが、高橋鐵は『あまとりあ』に執筆者および資料提供者として深く関わってはいるものの、「発行者」あるいは「主宰者」ではない。
- ※ 7 齊藤夜居は著書『悩まざりし人ありや一評伝 高橋鐵』（太平洋書屋、昭和 55 年 8 月）で、「こうした高橋鐵一流の筆法は終生あらたまらなかつたから、その臭みを厭う人は離れ、同臭のものは相寄る結果となった」と証言している。（同書 P.34）
- ※ 8 念のために言及すれば、高橋は昭和 25 年の『あるす・あまとりあ』や同 39 年の『続・高橋鐵コレクション』等でも当局の摘発（いずれも不起訴）を受けている。またそれ以前から自著で積極的に日本における性解放・啓蒙の遅滞を批判し続けており、この『生心リポート』をめぐる裁判だけが今日における彼のイメージを作り上げたわけではない。だがこの長年にわたる裁判と敗訴確定という“受難”が、より劇的に高橋の「不屈の性科学者」—あるいは“昭和の奇人”—像を人々に焼き付けるきっかけとなったこともまた、間違いのないであろう。
- ※ 9 「現代新聞批判」は現代新聞批判社発行の新聞批評紙（月 2 回刊）。また「廣告界」は誠文堂新光社刊行の広告業界誌。前者「現代新聞批判」において高橋は「鐵假面」のペンネームを使用し、昭和 13 年 11 月 1 日から 1 年にわたり主に新聞広告をテーマにしたコラムを連載した（昭和 14 年 2 月 15 日号のみ、「高橋鐵」名義）。

第2節 雑誌『精神分析』および東京精神分析学研究所について

次に、本稿で取り上げる雑誌『精神分析』の主宰者である大槻憲二、そして発行元となった東京精神分析学研究所について触れながら、同誌の創刊と戦前における展開、そしてその概要について以下に述べることとする。

○大槻憲二と東京精神分析学研究所

東京精神分析学研究所の主宰者、大槻憲二は明治24年兵庫県淡路島に生まれた。明治43年、神戸中学校を卒業後洋画家になるため上京し、東京美術学校へ進むも中退。大正3年に早稲田大学予科に入学し今度は文芸活動を志すようになる。大正7年に同大学本科（英文学）を卒業後、鉄道省運輸局に入省するも6年あまりで退職。それと前後して文芸評論家としての活動をはじめ、『早稲田文学』誌上にウイリアム・モイスなどを題材とした評論作品を発表するようになった。

昭和初年度頃からは大槻自身の「神経症」の克服体験などをきっかけにフロイト精神分析学に関心を持ち、早稲田大学時代の師・長谷川誠也（天溪）らとともにその研究を開始している。

そして昭和3年、大槻は長谷川、矢部八重吉、対馬完治、長田秀雄、松居松翁、馬渡一得、酒井由夫の7人とともに自宅^(※1)を拠点とする「東京精神分析学研究所」を設立し、前掲の機関誌『精神分析』および会員著書の発行、講演、研究会の開催など精神分析学の普及・研究に関するさまざまな活動を行った。また、昭和4年12月には同研究所編『フロイト精神分析学全集』（大槻憲二ほか訳、春陽堂）の刊行を開始している。

日本におけるフロイト精神分析学の紹介はすでに明治末年ころから始まっているが、東京精神分析学研究所が設立された昭和初頭は、大槻らの前掲『フロイト精神分析学全集』とほぼ同時期に安田徳太郎、丸井清泰、正木不如丘らが翻訳に携った『フロイト精神分析大系』（アルス社）が刊行されるなど、国内における精神分析に関する情報環境やその需要者層数が一定のまとまりを見せはじめた時期であり、続く『精神分析』の刊行もその一端であると言えよう^(※2)。

こうした経歴、また後に大槻が自ら著作内で「私は元来、医者ではなく、文科系の素質と教育とを受けて来た者である」^(※3)と述べているように、彼はもともと医学畑ではなく、主に文芸・社会評論の分野で長く活動してきた人物であった。そうした彼のインタージャンルな活動は、後掲するように『精神分析』および東京精神分析学研究所の活動コンセプト、内容に深く影響していると言える。本節後半に挙げる『精神分析』各号のテーマや掲載論文、執筆者からも判る通り、この東京精神分析学研究所の活動内容は医学系や臨床系というよりも大槻を中心とした「フロイト精神分析学を主軸とした人文科学研究会」としての性格が強いものであり、昭和8年5月、すなわち『精神分析』スタート時点での研究所のメンバーには江戸川乱歩や劇作家の松居松翁、桃多郎父子、民俗学者の中山太郎、公爵の岩倉具榮をはじめ47人が名を連ねている（昭和8年5月号 P.54～57）。後に乱歩は著書『探偵小説四十年』（桃源社、昭和36年7月）で東京精神分析学研究所入会と主なメンバーの多士多才ぶりについて次のように言及している。

右の春陽堂の方の全集（櫻庭註：大槻による『フロイト精神分析学全集』）を殆ど一手に訳していた大槻憲二氏が昭和八年の初めごろ（或いはもっと早くからその母体はあったのかも知れないが、会員が充実したのはそのころからで、機関誌『精神分析』も昭和八年四月号から創刊された）精神分析研究会というものをはじめ、私も誘われてそのメンバーに加わった。

機関誌「精神分析」第一号の口絵に、会員の集まりの写真がのっている。場所は萬世橋駅前の「アメリカン・ベイカリー」で、その写真は二十人ほど集まっているが、文筆関係の人では、右に記した長谷川天溪、松井松翁、その息子さんの松井桃多郎、（この人は戦後「蟻の町」の指導者として新聞などによく書かれる松井桃楼君である）、田内長太郎（ヴァン・ダインの長序を訳した人）、長谷川浩三（元博文館社員）、中山太郎（著名の民族学者）、加藤朝鳥（明治後期の翻訳家として知らる）、など。（同書 P.198）

また高橋鐵については、

今の性科学家高橋鉄君もこの会のメンバーだったらしいが、機関誌第一号の会員表にはのっていない。会合でも私は顔を合わせた記憶がない。私は半年余りで会合にでなくなってしまったから、高橋君はその後に会員に加わったのではないかと思う。 (同)

と、乱歩が研究会会員であった時点では面識（あるいはその認知）がなかった旨を触れている。

なお、ここで乱歩が「機関誌『精神分析』も昭和八年四月号から創刊された」としているのは前掲経緯の通り、同年5月の誤りと思われる。一方、高橋鐵が東京精神分析学研究所に入会したのは昭和8年12月であるが、その詳細については第4節の表1および第6節にて取り上げることとした。

研究所の会員数は戦前期を通じて漸増し、誌面に不定期に掲載された「本研究所関係者名簿」で確認できる参加者数は、最盛期で156人に上っている^(※4)。研究所内の組織はヒステリー・強迫症・妄想症等の神経症治療および性格改造^(※5)を行う「分析部」、講演・講習会の開催や講師派遣を担当する「教育部」、また書籍および機関誌の編集を行う「出版部」の三部に分かれており、対外活動の中核となったのは『精神分析』の刊行と精神分析映画上映や講演会^(※6)開催などのイベント事業であった。

また内部向けには、会員間の定期的な交流・研究発表の場として「研究会」が、書籍の読解・学習の場として「講習会」が設けられていた（研究会、講習会の開催日時、場所、主な内容および高橋鐵加入以降の彼の発言、活動については第4節および第5節の表を参照）。研究会は都内の飲食店を会場に毎月下旬に行われ、講習会は東京精神分析学研究所を会場^(※7)として毎月第一月曜日の夜に開催されている。

高橋鐵参加以前の研究会の活動内容については第4節の表2にまとめているが、ここでも江戸川乱歩の「現存の若者宿に就いて」や小倉清三郎の「幻を立聞く女」など、文学、民俗学、またメディア時評に精神分析学を取り入れた多様な発表・発言が行われていたことが確認でき、研究者向けの学究的な勉強会としてだけでなく、精神分析に関心を寄せた文化人のサロンとして機能して

いたことが伺える。

○『精神分析』について

『精神分析』は昭和8年5月より刊行が開始された精神分析学とその援用研究をテーマとする東京精神分析学研究所の機関誌で、大槻憲二はじめ研究所員の論考発表の場として、また内外の精神分析学に関する情報発信の場として同研究所の事業の中でも重要な位置を占めていた。(なお、創刊号から昭和8年7・8月号までは不二出版社、昭和8年9・10月号以降のものは東京精神分析学研究所出版部から刊行されている)

各号おおよそ100~120ページ前後のボリュームで、昭和8年7月号以降は毎号のごとの特集テーマ(「教育」や「児童心理」、「伝説」など)が設定されるようになっていく。内容は所員の論文のほか、寄稿記事、時評、コラム、会員活動の紹介や精神分析学界の動向などを報じる記事が掲載されていた。執筆陣には所員である長谷川誠也、岩倉具榮、江戸川乱歩、中山太郎、高橋鐵はもちろん、森茉莉(昭和8年9月号)ら文壇人もたびたび登場している。

昭和10年3・4月号のP.3に掲載された「本誌の特色と意圖」では、『精神分析』の内容を次のように謳っている。

- 一、関係者にはわが國に於ける斯學の諸權威を網羅してゐること。
- 一、海外斯學界と常に通信し、提掣し、またその活氣ある運動の詳細なる報道に努めてゐること。
- 一、分析學、精神病學、神經學、教育學、心理學、民俗學、宗教學、犯罪學に關係する諸方の研究室、學校、診療所、病院などを探訪して、その様子を讀者に紹介し双方の便を圖れること。
- 一、時事批評に力を注ぎ、新科學の立場より常に活發に、社會諸方面の問題に示唆を與へつゝあること。
- 一、専門家のためのみならず、一般讀者のためにも『講座』と『語彙解説』と『アップウブ』欄とを設けてゐること。
- 一、諸種の相談に應じて懇切なる答辯を與へてゐること。

- 一、新しい科學は新しい人材に俟つとの建前より、常に新人登用の用意を有すること。
- 一、歐州斯學界の重要な論文は常に翻譯紹介すること。
- 一、斯學は東洋的科學なりとの信條に基き、わが國に獨創的なる分析學の樹立に着々邁進しつゝあること。

ここで宣言されているとおり『精神分析』は純然たる學術誌ではなく、會員の論文に加え、大槻憲二が「不老泉主人」の名で執筆したコラム『アプフウブ』等^(※8)各種の読み物記事や時評、時に小説や戯曲をも掲載するなどいわば「精神分析をテーマにした総合雑誌」的内容となっていた。また後掲の書誌データからも伺えるように、各号のテーマや論文内容も精神分析学のみならず他の学問領域にまたがる非常にバラエティに富んだものとなっており、前述の通り主宰者である大槻憲二の履歴、そして刊行元である東京精神分析学研究所の多様性が強く反映されていると言える。

部数は当初400部前後であったが、後に1200部程まで増えたとされる^(※9)。当初は月刊誌としてスタートしたが、昭和8年7・8月号から一度隔月刊化され、さらに昭和13年4月号以降は奇数月号をそれまでの体裁と同じ「正誌」、偶数月号を冊子形態で刊行（購読会員には無料配布、別途購入の場合は一部5銭にて販売）とした再月刊化を行うなど、研究所の財政や社会状況（製作コストの増大、雑誌統制の影響等）に応じて刊行形態はめまぐるしく変わった。再月刊化時の冊子版『精神分析』（偶数月号）はボリューム7~8ページの誌面に論文（コラム）一本と会員活動の紹介や国内における精神分析学の動向記事が組み合わされたもので、掲載論文・コラムについてはすべて大槻憲二もしくは研究所の各部担当者の執筆による、いわば会報パンフレットのな体裁、内容のものである。

この『精神分析』は、「本論の目的」でも触れたように政府の統制を受け昭和16年（1941年）3月号をもって一度廃刊^(※10)となるものの、敗戦後の昭和27年（1952年）1月に戦前の巻号を引き継いで再開された。その後も刊行は続けられたが、昭和52年（1977年）2月に主宰者である大槻が死去、同年

4月号（第三十五卷第一号）をもって終刊となった。本稿で中心的に取り扱っているのは、そのうち高橋鐵が誌上において活動を行った昭和9年1月号から戦前最後の刊行となる昭和16年3月号まで^(※11)の『精神分析』である。

○『精神分析』創刊号～昭和16年3月号書誌

以下、各号の題号、主な論文・記事および奥付までのページ数（ノンブルの無い巻頭巻末広告、付録頁等を除く）などの書誌情報を掲載する。発行年月日については同じく奥付記載のもの。また必要なものについては備考を付けた。なお、高橋鐵に関する情報については第4節～第6節の内容と重複するため、本節では掲載号の「備考」欄に、掲載論文名等必要最低限の事柄について記するに留めた。

○昭和8年5月号（第一巻第一号）（奥付まで、以下同）133ページ、定価60銭、同年5月1日発行

【題号】創刊号

【主な論文・記事】『創刊の辞』（大槻憲二）、『エディポス物語と仏典中の類似伝説』（長谷川誠也）、『J・A・シモンズのひそかなる情熱（一）』（江戸川乱歩）など。

○昭和8年6月号（第一巻第二号）116ページ、定価50銭、同年6月1日発行

【題号】フロイト喜劇祝祭劇記念號

【主な論文・記事】『犯罪と罪障感との関係一八つ切事件の場合』（矢部八重吉）、『J・A・シモンズのひそかなる情熱（二）』（江戸川乱歩）、『フ博士喜寿祝祭劇記録』（松居松翁ほか）など。

【備考】『フ博士喜寿祝祭劇記録』は、昭和8年4月20、21日の両日に朝日新聞社講堂で開催された研究所主催の演劇会。松居松翁作の『エディポス王』および大槻憲二作『養父』が上演された。

○昭和8年7月号（第一巻第三号） 90 ページ、定価 50 銭、同年 7 月 1 日発行

【題号】教育研究號

【主な論文・記事】『精神分析と教育』（長谷川誠也）、『乗馬咎めの神仏』（中山太郎）、『精神分析昔話』（上野陽一）など。

【備考】この號から発行元が「不二出版」から「東京精神分析学研究所出版部」に変更。

○昭和8年8月号（第一巻第四号） 116 ページ、定価 50 銭、同年 8 月 1 日発行

【題号】第一・夢の研究

【主な論文・記事】『夢の新説』（S・フロイド／大槻憲二 訳）、『ベルグソンの夢の研究』（長谷川誠也）、『J・A・シモンズのひそかなる情熱（三）』（江戸川乱歩）など。

【備考】この号に、研究所創立者の一人で劇作家の松居松翁死去（同年 7 月 4 日）への弔意文記事が掲載されている。

○昭和8年9月号（第一巻第五号） 114 ページ、定価 50 銭、同年 9 月 10 日発行、

【題号】児童心理研究號

【主な論文・記事】『フロイド氏と児童心理を語る』（高島平三郎）、『変態心理の児童』（長谷川誠也）、『文藝 細い葉蔭への欲望（感想）』（森茉莉）など。

○昭和8年10月号（第一巻第六号） 117 ページ、定価 50 銭、同年 10 月 1 日発行

【題号】社会思想・犯罪心理研究號

【主な論文・記事】『犯罪者の心理』（長谷川誠也）、『J・A・シモンズのひそかなる情熱（四）』（江戸川乱歩）など。

【備考】江戸川乱歩の『J・A・シモンズのひそかなる情熱』はこの号掲載分

をもって中絶している。

○昭和8年11月号（第一巻第七号） 121 ページ、定価 50 銭、同年 11 月 1 日発行

【題号】 戦争心理研究號

【主な論文・記事】『精神分析思出の記』（諸岡存）、『マルクス・フロイド比較論捕遺』（大槻憲二）、『戦場に現れる健忘症』（長谷川誠也）など。

○昭和8年12月号（第一巻第八号） 107 ページ、定価 50 銭、同年 12 月 1 日発行

【題号】 第二・夢の研究號

【主な論文・記事】『夢と心霊現象』（S・フロイド、大槻憲二 訳）、『フロイド説以外の夢の心理的解説』（高島平三郎）、『夢と民俗』（中山太郎）など。

○昭和9年1月号（第二巻第一号） 96 ページ、定価 50 銭、同年 1 月 1 日発行

【題号】 心理療法研究號

【主な論文・記事】『精神病治療可能論』（諸岡存）、『聯想解放法と抵抗緩和法』（大槻憲二）、など。

【備考】 この号の「研究会 12 月例会」報告記事で高橋鐵の名が誌上初出。

○昭和9年2月号（第二巻第二号） 98 ページ、定価 50 銭、同年 2 月 1 日発行

【題号】 女性心理研究號

【主な論文・記事】『青年期に於ける女性と自殺意識』（宮田修）、『コロオレーナス母子の心理』（長谷川誠也）、『女性論』（フロイド、大槻憲二 訳）など。

○昭和9年3月号（第二巻三号） 102 ページ、定価 50 銭、同年 3 月 1 日発行

【題号】 傳説研究號

【主な論文・記事】『傳説の系統と形式』（中山太郎）、『キルヤム・モリス『地上樂園』の研究（大槻憲二）など。

○昭和9年4月号（第二巻第四号） 101 ページ、定価 50 銭、同年 4 月 1 日発行

【題号】文學研究號

【主な論文・記事】『ユングの文芸觀』（長谷川誠也）、『近代文學の心理と技巧』（北村常夫）、『科學的（精神分析的）文學批評論序說』（大槻憲二）など。

【備考】この号 84 から 85 ページまで、高橋鐵の『春の自由聯想』が掲載。

○昭和9年5月号（第二巻第五号） 102 ページ、定価 50 銭、同年 5 月 1 日発行

【題号】ドストイェフスキー研究號—又は、人間性研究號—

【主な論文・記事】『ドストイェフスキーと父殺し』（フロイド、大槻憲二訳）、『アドラーのドストイェフスキー論』（長谷川誠也）、『睡眠恐怖症の分析』（矢部八重吉）など。

○昭和9年7・8月号（第二巻六号） 107 ページ、定価 50 銭、同年 7 月 1 日発行

【題号】戀愛心理研究號

【主な論文・記事】『戀愛態度に於ける男女の別』（大槻憲二）、『自己戀愛と超自我』（岩倉具榮）など。

【備考】この号から隔月刊となる（6月号は休刊）。また、高橋鐵『初戀ガイド』が掲載。なお、表紙の巻号が「第二巻七号」と誤って記されている。

○昭和9年9・10月号（第二巻第七号） 105 ページ、定価 50 銭、同年 9 月 1 日発行

【題号】性慾心理研究號

【主な論文・記事】『性慾新考』（諸岡存）、『ある性的犯罪者に就いて』（式場

隆三郎)、『幼児定着と其の愛情生活への影響』(霜田静志)など。

【備考】この号に式場隆三郎の論文が初出。また、高橋は『性風俗の検閲について當局に訴ふ』を掲載。

○昭和9年11・12月号(第二巻第八号) 95ページ、定価50銭、同年11月1日発行

【題号】夫婦生活研究號

【主な論文・記事】『夫婦生活に於ける性的關係と道德的關係』(大槻憲二)、『初夜權を考察して現代夫婦生活の葛藤に及ぶ』(長崎文治)、『夫婦生活と「坤卦」』(長谷川誠也)など。

【備考】高橋鐵が『川柳による夫婦生活の分析』を掲載。またこの号以降の「本研究所關係者名簿」には平塚雷鳥の名が加わる。92~93ページの研究会9月例会報告記事に、会場の手配に平塚雷鳥の尽力があったことが記されており、この際に会員となったものか。

○昭和10年1・2月号(第三巻第一号) 113ページ、定価50銭、同年1月1日発行

【題号】(第二)兒童心理研究號

【主な論文・記事】『子供の精神分析的研究』(霜田静志)、『五歳男兒の恐怖症の分析』(S・フロイド、大槻憲二 譯)など。

【備考】高橋鐵が『水に誘はれる人の精神分析』を掲載。

○昭和10年3・4月号(第三巻第二号) 104ページ、定価50銭、同年3月1日発行

【題号】宗教心理研究號

【主な論文・記事】『精神分析學上より見たる二つの宗教』(古澤平作)、『精神分析學より見たる宗教心理』(大槻憲二)、『ゲーテとフロイド』(武田忠哉)など。

【備考】この号の「本研究所關係者名簿」に高橋鐵の妹、春子が初出。

○昭和 10 年 5・6 月号 (第三卷第三号) 101 ページ、定価 50 銭、同年 5 月 1 日発行

【題号】自殺及び情死の心理

【主な論文・記事】『自殺、情死に於ける死の詩化心理に就いて』(長崎文治)、『マゾヒズムと自殺心理』(岩倉具榮)、『死の傳説としての羽衣傳説』(倉橋久雄) など。

【備考】高橋鐵が『雪山に誘はれむ願望—スキーイング心理分析のノート—』を掲載。

○昭和 10 年 7・8 月号 (第三卷第四号) 108 ページ、定価 50 銭、同年 7 月 1 日発行

【題号】同性愛と異性愛

【主な論文・記事】『同性愛及び異性愛の心理』(大槻憲二)、『同性愛の悲劇『淋しさの泉』に浮いて』(宮田齊)、『自殺、情死に於ける死の美化心理』(長崎文治) など。

【備考】高橋鐵が『同性愛抉別録 附、現代同性愛の社會分析』を掲載。

○昭和 10 年 9・10 月号 (第三卷第五号) 104 ページ、定価 50 銭、同年 9 月 1 日発行

【題号】家庭問題と親子関係

【主な論文・記事】『嫁姑問題のリビドー運命史的意義』(大槻憲二)、『家庭内に於ける女中のリビドー關係に就いて』(高水力太郎)、『家族關係の戀愛に及ぼす影響』(北垣隆一) など。

【備考】高橋鐵が『ジャーナリズムへ迫る精神分析學—精神分析的探偵小説四つについて—』を掲載。

○昭和 10 年 11・12 月号 (第三卷第六号) 104 ページ、定価 50 銭、同年 11 月 1 日発行

【題号】常態及び變態の性心理

【主な論文・記事】『變態性欲論』（諸岡存）、『常態性欲と變態性欲』（早坂長一郎）、『分析學より見たる變態性欲心理』（大槻憲二）など。

【備考】高橋鐵が『サディズムの藝術及び社會への顯現』を掲載。

○昭和 11 年 1・2 月号（第四卷第一号） 98 ページ、定価 50 銭、同年 1 月 1 日発行

【題号】性格改造研究號

【主な論文・記事】『性格學としての精神分析學』（大槻憲二）、『ユージン・オニールの思想と精神分析』（山口太郎）など。

【備考】高橋鐵が『性格改造は精神分析學によつてのみ』、『代表的煩悶 身上相談分析解答見本帖』を掲載。

○昭和 11 年 3・4 月号（第四卷第二号） 117 ページ、定価 50 銭、同年 3 月 1 日発行

【題号】母性と妖婦・研究號

【主な論文・記事】『母性の長子憎悪と日大生殺し事件』（長崎文治）、『妖婦の近代性と社會性』（北山隆）、『母性愛と妖婦愛』（大槻憲二）など。

【備考】高橋鐵が『妖婦への感傷愛を析く』を掲載。

○昭和 11 年 5・6 月号（第四卷第三号） 112 ページ、定価 50 銭、同年 5 月 1 日発行

【題号】夢と幻覺・研究號

【主な論文・記事】『メスカリン服用に因る幻覺の實驗』（戸川行男）、『夢の分析の難點と不明點』（奥本島田）、『夢と幻覺と錯覺との關係』（大槻憲二）など。

【備考】高橋鐵が『精神分析學に依る廣告心理學の革命』、『映畫と精神分析』の 2 作を掲載。

○昭和 11 年 7・8 月号（第四卷第四号） 104 ページ、定価 50 銭、同年 7 月 1

日発行

【題号】 児童分析と教育

【主な論文・記事】『精神分析學と子供の教育』（霜田静志）、『教育學としての精神分析學』（大槻憲二）、『ロレンスの同性愛小説』（岩倉具榮）など。

○昭和 11 年 9・10 月号（第四卷第五号） 101 ページ、定価 50 銭、同年 9 月 1 日発行

【題号】 愛慾葛藤の諸問題

【主な論文・記事】『嫉妬及び復讐の愛慾葛藤』（大槻憲二）、『阿部定の愛慾葛藤心理』（高水力太郎）など。

【備考】高橋鐵が『「心の水泡」抄』を掲載。なお、この号の表紙では高橋の作品タイトルが『芭蕉と一茶の比較分析』になっている。

○昭和 11 年 11・12 月号（第四卷第六号） 110 ページ、定価 50 銭、同年 11 月 1 日発行

【題号】 道徳の分析

【主な論文・記事】『精神分析道徳論』（大槻憲二）、『精神分析對道徳』（D・H・ロレンス、岩倉具榮 訳）など。

○昭和 12 年 1・2 月号（第五卷第一号） 124 ページ、定価 50 銭、同年 1 月 1 日発行

【題号】 思春期の研究

【主な論文・記事】『思春期の特質』（大槻憲二）、『青年期の研究』（土屋秋實）、『老子の母コムプレクス』（長谷川誠也）など。

【備考】高橋鐵が『現代青年に禍根を告げる—「思春期心理」の崩壊—』、『流行現象の無意識的意圖』、『「築地」よハムレット根性を捨てよ—シルレル及びシルレル愛好の分析—』の三作を掲載。

○昭和 12 年 3・4 月号（第五卷第二号） 110 ページ、定価 50 銭、同年 3 月 1

日発行

【題号】不良少年少女心理

【主な論文・記事】『不良少年の犯罪性と分析學』（杉田直樹）、『不良少年少女の分析的取扱方』（大槻憲二）、『少年の教育問題と心理學』（北山隆）など。

【備考】高橋鐵が『不良少年教化者への公開状』を掲載。

○昭和 12 年 5・6 月号（第五卷第三号） 111 ページ、定価 50 銭、同年 5 月 1 日発行

【題号】生理と心理

【主な論文・記事】『器質的疾患に於ける心理的要素』（木村廉吉）、『精神分析と条件反射』（大槻憲二）、『萬葉集・笠女郎の夢の分析』（長谷川誠也）など。

○昭和 12 年 7・8 月号（第五卷第四号） 107 ページ、定価 50 銭、同年 7 月 1 日発行

【題号】男性と女性

【主な論文・記事】『男性と女性との生物分析』（大槻憲二）、『性生活に於ける男女の對立』（延島英一）など。

○昭和 12 年 9・10 月号（第五卷第五号） 114 ページ、定価 50 銭、同年 9 月 1 日発行

【題号】男女性格分析

【主な論文・記事】『ナポレオンの性格』（延島英一）、『夏目漱石の性格』（北山隆）、『千姫の精神分析』（大槻憲二）など。

○昭和 12 年 11・12 月号（第五卷第六号） 111 ページ、定価 50 銭、同年 11 月 1 日発行

【題号】幼児心理研究

【主な論文・記事】『早熟兒に就いて』（小山良修）、『乳兒及び幼児の心理』（大槻憲二）、『正常兒と異常兒』（木村廉吉）など。

○昭和13年1・2月号(第六卷第六号) 116ページ、定価50銭、同年1月1日発行

【題号】夢と象徴・研究

【主な論文・記事】『東西夢の象徴の比較』(大槻憲二)、『中年シェクスピアの戀愛苦』(岩倉具榮)など。

【備考】高橋鐵の『象徴構成の無意識心理規制』が掲載。高橋はこれにより昭和12年度フロイド賞を受賞。

○昭和13年3・4月号(第六卷第二号) 111ページ、定価50銭、同年3月1日発行

【題号】文藝と絵畫・研究

【主な論文・記事】『絵畫及び文藝に於ける超現實性』(大槻憲二)、『夏目漱石の精神分析(その文學)』(北山隆)、『柿實る』(倉橋久雄)など。

【備考】倉橋久雄の『柿實る』は戯曲。98ページに高橋鐵のフロイド賞贈與式の報告記事あり。また、次号より8ページほどのパンフレット形式による偶数月号を挟み、変則的な「月刊制」に戻すことを予告している。

○昭和13年4月号(第六卷第三号) 7ページ、定価5銭、同年4月1日発行

【題号】なし(偶数月号)

【主な論文・記事】『東洋醫學と精神分析』(大槻憲二)

【備考】パンフレット形式による偶数月号の初刊。

○昭和13年5月号(第六卷第四号) 112ページ、定価50銭、同年5月1日発行

【題号】處女性の問題

【主な論文・記事】『羽衣型傳説に於ける處女性問題』(高水力太郎)、『小説『若い人』に於ける處女性の問題』(大槻憲二)など。

○昭和13年6月号(第六卷第五号) 7ページ、定価5銭、同年6月1日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『斷種法と優生學』（大槻憲二）

○昭和 13 年 7 月号（第六卷第六号） 112 ページ、定価 50 銭、同年 7 月 1 日発行

【題号】貞操心理の研究

【主な論文・記事】『貞操心理の問題』（大槻憲二）、『夏目漱石と一茶』（宮田戊子）、『姦通文學類別考』（倉橋久雄）など。

○昭和 13 年 8 月号（第六卷第七号） 7 ページ、定価 8 銭、同年 8 月 1 日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『分析治療を受けむとする人々へ』（分析部主任）

【備考】この号より 1 部 8 銭に値上げ。

○昭和 13 年 9 月号（第六卷第八号） 113 ページ、定価 50 銭、同年 9 月 1 日発行

【題号】自己愛の研究

【主な論文・記事】『フロイドのナルチスムス観』（ハヴロック・エリス、延島英一 訳）、『ナルチスムスの本質』（大槻憲二）など。

○昭和 13 年 10 月号（第六卷第九号） 7 ページ、定価 8 銭、同年 10 月 1 日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『精神分析邦文献に就いて』（出版部主任）

【備考】この号より 1 部 10 銭に値上げ。

○昭和 13 年 11 月号（第六卷第十号） 113 ページ、定価 50 銭、同年 11 月 1 日発行

【題号】神經症の研究

【主な論文・記事】『精神分析學から見た神經症』（大槻憲二）、『芭蕉の虚無思想とその心理機制』（宮田戊子）、『リビドーの測定』（延島英一）など。

○昭和13年12月号（第六卷第十一号） 7ページ、定価10銭、同年12月1日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『精神分析學のすゝめ』（編輯主任）

○昭和14年1月号（第七卷第一号） 118ページ、定価50銭、同年1月1日発行

【題号】金銭心理研究

【主な論文・記事】『精神分析學から見た金銭心理』（大槻憲二）、『女性心理に於ける金銭』（延島英一）など。

【備考】高橋鐵が『賭博の心理』を掲載。

○昭和14年2月号（第七卷第二号） 8ページ、定価10銭、同年2月1日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『自尊心の崩壊と再建』（大槻憲二）

○昭和14年3月号（第七卷第三号） 110ページ、定価50銭、同年3月1日発行

【題号】心理經濟の研究

【主な論文・記事】『心理經濟論』（大槻憲二）、『經濟界の精神病理』（高水力太郎）、『苦惱の解消法』（奥本島田）など。

【備考】削除命令のため101ページから108ページまで無し。実ページ数は102ページ。

○昭和14年4月号（第七卷第四号） 8ページ、定価10銭、同年4月1日発行

行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『異常児童と精神衛生』（杉田直樹）、『國語運動と精神衛生』（大槻憲二）

【備考】8ページの編輯後記に前号のページ抜け（削除命令による）を報告・謝罪する記事あり。

○昭和 14 年 5 月号（第七卷第五号） 95 ページ、定価 50 銭、同年 5 月 1 日発行

【題号】性自己處置の研究

【主な論文・記事】『性自己處置の問題』（大槻憲二）『芭蕉と性愛』（宮田戊子）など。

【備考】本号奥付の次ページに、「文献維持委員制」を新設する旨、またその委員を募集する旨の記事あり。

○昭和 14 年 6 月号（第七卷第六号） 8 ページ、定価 10 銭、同年 6 月 1 日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『全體主義に於ける部分主義』（大槻憲二）、『「土」とその作者』（倉橋久雄）

○昭和 14 年 7 月号（第七卷第七号） 100 ページ、定価 50 銭、同年 7 月 1 日発行

【題号】愛情と憎悪

【主な論文・記事】『愛憎心理の構成に就いて』（高水力太郎）、『愛憎心理の教育的操作法』（大槻憲二）など。

○昭和 14 年 8 月号（第七卷第八号） 8 ページ、定価 10 銭、同年 8 月 1 日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『国民精神保健運動』（大槻憲二）

○昭和 14 年 9 月号（第七卷第九号） 96 ページ、定価 50 銭、同年 9 月 1 日発行

【題号】精神病への理解

【主な論文・記事】『精神病者の心理の分析的観察』（大槻憲二）、『芭蕉の無意識象徴』（宮田戊子）など

【備考】高橋鐵が『精神病者を描いた文學』を掲載。彼が『精神分析』誌上において発表した最後の論文となった。

○昭和 14 年 10 月号（第七卷第十号） 7 ページ、定価 10 銭、同年 10 月 1 日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『フロイドのユダヤ問題観』（記者）

○昭和 14 年 11 月号（第七卷第十一号） 94 ページ、定価 50 銭、同年 11 月 1 日発行

【題号】結婚の諸問題

【主な論文・記事】『結婚心理の諸相』（大槻憲二）、『トルストイの結婚観—『クロイツェル・ソナタ』の分析批判』（高水力太郎）、『心理研究ノート』（長谷川誠也）など。

【備考】この号 55 ページより、フロイドの死去に対する追悼文が掲載。江戸川乱歩、高村光太郎らも寄稿している。

○昭和 14 年 12 月号（第七卷第十二号） 7 ページ、定価 10 銭、同年 12 月 1 日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『現下に於ける知識階級の覺悟』（大槻憲二）

【備考】この号には、昭和12年内に刊行された『精神分析』の内容一覧表があり、実質10ページ構成になっている。

○昭和15年1月号（第八巻第一号） 94ページ、定価60銭、同年1月1日発行

【題号】東洋文化心理

【主な論文・記事】『東洋新文化と日本分析學の使命』（大槻憲二）、『東洋と西洋の無意識論理』（土屋秋實）、『老子の母定着に就いて』（伊福部隆彦）など。

【備考】この号より一部60銭に値上げ。

○昭和15年2月号（第八巻第二号） 8ページ、定価10銭、同年2月1日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『性格を強くする法』（大槻憲二）

○昭和15年3月号（第八巻第三号） 95ページ、定価60銭、同年3月1日発行

【題号】日本女性心理

【主な論文・記事】『女性の墮落願望とその道徳性』（大槻憲二）、『女性心理の本質』（土屋秋實）、『作品より見たる宮本百合子』（宮田戌子）など。

○昭和15年4月号（第八巻第四号） 8ページ、定価10銭、同年4月1日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『神經病の城郭』（大槻憲二）

○昭和15年5月号（第八巻第五号） 95ページ、定価60銭、同年5月1日発行

【題号】病気と健康

【主な論文・記事】『病氣と健康との相互關係』（大槻憲二）、『病氣の心理性』（塚崎茂明）、『しゃっくり病』（高村光太郎）など。

【備考】高村光太郎の『しゃっくり病』は、しゃっくりが止らない奇癖がある高村の症状と、それに対する研究所編輯者の解説で構成されたもの。

○昭和 15 年 6 月号（第八卷第六号） 7 ページ、定価 10 銭、同年 6 月 1 日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『分析治療と自力本願』（大槻憲二）

○昭和 15 年 7 月号（第八卷第七号） 94 ページ、定価 60 銭、同年 7 月 1 日発行

【題号】日本人の性格

【主な論文・記事】『日本人の性格的缺陷とその原因』（大槻憲二）、『日本人及び日本文化の性格』（土屋舒廣）など。

【備考】「土屋舒廣」は、土屋秋實の改名による。

○昭和 15 年 8 月号（第八卷第八号） 8 ページ、定価 10 銭、同年 8 月 1 日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『ヒトラーの問題』（大槻憲二）

○昭和 15 年 9 月号（第八卷九号） 98 ページ、定価 60 銭、同年 9 月 1 日発行

【題号】育兒法心得

【主な論文・記事】『育兒法講話』（大槻憲二）、『育兒の心理學的基礎』（土屋舒廣）など。

○昭和 15 年 10 月号（第八卷十号） 8 ページ、定価 10 銭、同年 10 月 1 日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『自身を養ふ法』（大槻憲二）

【備考】表紙の巻数が「第6巻」と誤記されている。またこの号8ページの「研究所だより」で長谷川誠也の死去が告知されている。

○昭和15年11月号（第八卷十一号） 93ページ、定価60銭、同年11月1日発行

【題号】統制と個人

【主な論文・記事】『全體の統制と個人の統制』（大槻憲二）、『日本の童話分析考』（土屋舒廣）、『子供の神経症の豫防法』（高水力太郎）など。

【備考】この号2～4ページに、東京精神分析学研究所創立者の一人・長谷川誠也の追悼記事が掲載（前号に死去報あり）。また、78ページに昭和十五年度フロイド賞銓衡決定記事（土屋舒廣『東洋と西洋の無意識論理』）が掲載。

○昭和15年12月号（第八卷第十二号） 7ページ、定価10銭、同年12月11日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『分析を受ける人の覺悟』（大槻憲二）

○昭和16年1月号（第九卷第一号） 94ページ、定価60銭、同年1月1日発行

【題号】不眠と快眠

【主な論文・記事】『睡眠の心理と不眠症の治療』（大槻憲二）、『不眠症と貪眠症の治療及び安眠』（土屋舒廣）など。

○昭和16年2月号（第十卷第二号） 8ページ、定価10銭、同年2月1日発行

【題号】なし（偶数月号）

【主な論文・記事】『幻影の醫學』、『假名國字改稱問題』（ともに大槻憲二）

○昭和16年3月号（第十卷第三号） 92 ページ、定価 60 銭、同年 3 月 1 日発行

【題号】 日本的教育

【主な論文】『日本教育の心理學的意義』（大槻憲二）、『乗物酔いの精神分析』（土屋舒廣）など。

【備考】 戦前期の『精神分析』は本号が最後となる。編輯後記に記載された次号の題号予告は「言語心理と國語問題」。

【第2節 注記】

- ※1 東京市本郷区駒込動坂町三二七、現在の文京区本駒込付近。
- ※2 立命館大学教授の佐藤達也（心理学）は、サトウタツヤ名義で執筆した『精神分析《戦前編》復刻版』別冊（不二出版、平成20年）の解説記事で「大槻が一九九三年（昭和8年）に東京精神分析学研究所の機関誌として発刊した『精神分析』は、日本における精神分析の研究が成熟しつつあり、そのサークルができあがりつつあったことを示している。また、毎月刊というこの雑誌の発刊形態からもわかるとおり、この雑誌を支える書き手及び読み手層がともに成立していたことは見逃せない」（同書P.22）と指摘している。
- ※3 『私は精神分析で救われた 大槻憲二先生治療業績記録』所収の大槻憲二「精神療法と生命療法—緒言に代えて—」（東京精神分析学研究所三紀年記念行事の会・編／育文社、昭和36年）P.3～5
- ※4 昭和11年3・4月号 P.1～3に掲載。
- ※5 ここでいう「性格改造」は、研究所の事業内容では「悪癖、奇習など現実生活に不適當なる性向にして無意識病根に基づくもの」を治療する行為として定義づけられている。
- ※6 昭和10年10月5日（土）の13時および18時からの2回、東京仁壽講堂にて「名映畫分析鑑賞と講演の會」を研究所主催で開催している。詳細については第5節を参照。
- ※7 会員の紹介により「中外新藥商會」の会議室で行った回（昭和13年5

月、6月の例会)や、忘年会を兼ねて料理屋で行ったケース(昭和13年12月、昭和15年12月の例会)もある。詳細については第4節表1-2を参照。

- ※8 ドイツ語「Abhub (滓、屑の意)」から。なお、本稿第3節で取り上げているように、高橋も度々この「アプフウブ」欄を本名、もしくは「黄表紙鐵輔」のペンネームで担当している。
- ※9 『精神分析《戦前編》』の別冊(前掲)の解説記事「『精神分析』創刊まで——大槻憲二の前半生」(曾根博義)P.17を参照した。なお、同解説では、出典を『大槻先生還暦記念帖』(東京精神分析学研究所石川県分室、昭和26年)に大槻が寄稿した「精神分析的自伝」としている。
- ※10 翌月に「東京精神分析学研究所報」を刊行。こちらは戦中を通じて45号まで発行されたが未見。今後の調査課題としたい。
- ※11 本稿第3節に収録した表2では、参考のために高橋加入以前の創刊号から昭和八年十二月までのデータを含めている。

第3節 『精神分析』にて高橋鐵が発表した論文・記事リスト

以下、本節では『精神分析』誌上において高橋が発表した各論文、エッセイ、時評等諸作の概要を掲載年月順に挙げる。必要なものについては内容に関する解説を付け、タイトル・掲載号・掲載ページについては、各作品冒頭に掲出している。なお、彼の作中における様々な主張(特に精神分析やその解釈、診断に関するもの)については、事実関係や定義もふくめ、現在の精神分析学において主流でないもの、また誤りと思われるものも含まれているが、ここではすべて論中の趣旨に従いまとめている。

○春の自由聯想 昭和9年4月号、P.84~85

高橋鐵がはじめて『精神分析』誌上に掲載した作品(論文形式の初出は同年7・8月号に掲載された『初戀ガイド』。別掲参照)で、「リビドー」や「アニマ」、「補償作用」といった精神分析の用語をちりばめつつ、ある百貨店の店

頭、もしくは街頭の群衆といった趣の光景とそれに対する心情を自由連想法的に綴る詩になっており、場面や人物等の統一はない。なお、7・8月号に後述の『初戀ガイド』が掲載された際、編集後記において「氏は既に四月號にも執筆してゐられる」と触れられているのは本作のことと思われるが、掲載時点では高橋の名は記載されていない。

○初戀ガイド 昭和9年7・8月号、P.90～93

高橋の『精神分析』誌上における最初の論文。ただし、創作も含めれば同年4月号に発表した前掲の詩『春の自由聯想』が最も早い。内容は男女の“初恋”を論じたもので、「初戀の年齢」のデータと、古今の著名人および創作品における実例を挙げ、初恋が人間にとっての「リビドウ醇化の第一歩」であり、その体験にともなう葛藤や外傷が、その後の性愛傾向に大きな影響を与えると説く小論文である。なお、終盤（P.93）において「乳酸菌飲料カルピスはその柔軟な甘酸つばさを「初戀の味」に似てゐると宣傳してゐるのは相当頭がよい。」という一文があるが、高橋は日大在学中の大正15年から昭和3年ころまでカルピス株式会社の宣伝部でアルバイトをしており、別掲『水に誘はれる人の精神分析』でもその著書を取り上げている創業者・三島海雲の知遇を得たことを後掲の論文「水に誘はれる人の精神分析—三島海雲氏著「日本の水」を讀みて—」をはじめ各所で語っている。またこの経歴から、「初戀の味」というカルピスのキャッチコピーは高橋鐵が考案したもの、という“伝説”が語られることがある^(※1)が、これについては三島海雲が「考案者は^{こまき}驪城卓爾」である旨を明言していること^(※2)、また本作品においても、高橋鐵が「(このコピーの制作に)自分が関わった」旨の記述を一切していない点から、実際には高橋の考案したものではないと私（櫻庭）は考えている^(※3)。

○性風俗の檢閲に就いて當局に訴ふ 昭和9年9・10月号、P.60～73

文芸や映画における檢閲政策に対する提言の形をとった論文。キスや裸体などの性描写が含まれる作品が檢閲、發禁処分を受ける現状を批判。そうした行為は「本末をあやまつて現象丈を縛らうとする」ものであり、単純な取り締ま

りや禁圧では風俗改良はなされない、むしろそれらを受容する環境を整えて正しい理解を勧めることの方が風紀政策としては適当だと指摘している。一方で、「性風俗の進歩に大して効果をもたらさないものに対しては禁止もある點まで肯定すべきである」とし、終盤の論旨要約部分でも「検閲制度は刻々に進化すべきこと」とするなど検閲制度そのものの撤廃を訴えた内容にはなっていない（※4）。

論末で、ヴァン・デ・ヴェルデの『完全なる結婚』（“Die vollkommene Ehe”）や『愛^{カーマ・ストラ}経』、『はつはな』など30点の文献を「緊急に検閲禍をとくべきもの」として挙げている。

『精神分析』誌上に掲載されたものの中では、戦後の高橋鐵の「性解放」活動に最もつながりやすい内容であると言え、高橋自身も昭和40年に執筆したエッセイ「わが性探求の昭和史」（『現代の眼』5月号、現代評論社、P.173～181）等で、戦中の官憲に対する抵抗を語るエピソードの一つとして紹介している。ただし、同エッセイの中ではこの『性風俗の～』の発表時期が高橋鐵の大本営精動本部勤務時（昭和15年以降）のこととして記述されており、それが高橋の記憶違いであるのか、それとも自身のあえて入れ替えを行ったのかは不明である。

○川柳に依る夫婦生活の分析 昭和9年11・12月号、P.85～90

コラム欄「アブフウブ」に執筆した作品で、新婚から所帯の形成、熟年夫婦にいたるまでの結婚の形態、諸相を「綿を冠つて起きたいは翌る朝」、「新世帯、夜具に屏風を立て廻し」、「脛の毛をひくが女房の伸直り」等の川柳（時代は限定されていない）を引用することで解説したエッセイになっている。全体的には夫婦の情愛を描写し肯定的に描いているが、「単婚制の悲劇について」の項では「筆者が見る所によると、未だに単婚制と多婚制のいづれに進路を選ぶべきかについては古來より多くの學者も確定した論斷を敢て下していないと思ふ」と皮肉を交えた一文を付けている。なお、このコラムのみ他の「アブフウブ」欄に執筆した作品と異なり「高橋鐵」（本名）名義となっている。

○水に誘はれる人の精神分析—三島海雲氏著「日本の水」を讀みて— 昭和10年1・2月号、P.51～56

カルピス創業者であり、高橋自身も仕事を通じて関わりを持った三島海雲の著書『日本の水』、また日本の伝承や文学作品を取り上げ、古来より“水”を重視する人々の背景心理を精神分析的に解説するエッセイ。三島海雲自身のコンプレックス指摘や家庭状況への提言、また三島の周囲の人物に対する批判（「寄生蟲の烏合之衆」）が含まれ、全体的に高橋と三島との個人的交友を強調するトーンで書かれている（高橋とカルピス、また三島海雲との関わりについては前掲『初戀ガイド』の解説および注を参照）。論中で高橋は水の流転性を求める心理には変化への同一化欲求が、同じく冷涼な透明性を求める心理にはナルシズムと昇華欲の顕れが、また水への憧れそのものに「母への感傷愛」があるとし、多くの宗教における水に関連した儀式、そして伝説や文学、美術等に水を題材としたものが多い要因もここにある、と指摘している。なお、高橋は雑誌『新青年』昭和13年4月号に、水と胎内回帰願望の関連説を題材にした小説『浦島になつた男』を発表している。

○雪山に誘はれむ願望—スキーイング心理分析のノート— 昭和10年5・6月号、P.19～24

人はなぜ雪山に誘われ、レジャーとしてのスキーを楽しむのかを精神分析の援用によって解説するエッセイ。ここで高橋はスキーにおける斜面滑降は人々の無意識に潜む墜落願望（死の本能）を感じるための代替行為であり、多く女性としてイメージされる山、とりわけ雪山は母代償のシンボルであると説いている。一方で、スキー流行の背景を分析して「自然愛好や戸外運動の流行は有閑階級が不生産的生活に伴ふ閑暇を誇りながら過去に於る掠奪生活の巧妙勇猛奸智等の慣習を保存せんとする一形式に過ぎぬ」と批判的に捉えている。このスポーツやレジャー等の「消費文化」を資本主義社会における一種の「ガス抜き」であるとする批判的な見方は、高橋が翌年（昭和11年9・10月号）に発表する『「心の水泡」抄』でも見られる。（2作とも、論中で同じソースティン・ヴェブレンの『有閑階級論』引いており、その影響を受けた記述と見られ

る)

○**心中自殺・憫笑録** 昭和10年5・6月号、P.83～87

『精神分析』誌上において高橋鐵が「黄表紙鐵輔」名義を使用した最初のエッセイ。高橋はこのころから雑誌『日の出』や『オール讀物』誌上でエッセイや読み物記事を発表しており、その際に使用したペンネームが「黄表紙鐵輔」である。本作では昭和9年当時の自殺件数の多さに触れた上で、高橋自身が大きな影響を受けたという3件の自殺（世間を騒がせたある“ブルジョワ娘”、芥川竜之介、そして高橋自身の親友）を紹介し、とくに芥川竜之介の自殺を「私の半生をしきしめてくれた前車の一徹」、親友の自殺未遂と失踪を「私は彼の敗北で愈々人生の道に鬪争的になつた」と振り返っている。また古今東西のさまざまな自殺の事例を挙げた上で、「結局精神分析や階級鬪争思想のやうな鬪争的思想によらないでは自殺階級の没落防止は絶対に不可能である」と言及している。

○**同性愛抉剔録一附、現代同性愛の社會分析一** 昭和10年7・8月号、P.22～29

自身が同性愛者に接した体験（中学生および十八歳の時と回想）をはじめ、古今様々な同性愛者のケースに触れたエッセイ。前半～中盤では歌舞伎の女形や歴史上の男性同性愛者とその文化について、終盤では女性同性愛についての事例紹介に加え、少女歌劇の水の江瀧子を熱烈に支持する女性達の傾向を「ターキイズム」と呼び、「自由を獲得したといふ幻想によつて、實は彼女等は益々資本主義的男性支配の社會に隷屬し白奴隷化し、大資本の下に裸身を投げ込まれる」と批判している。前掲の「心中自殺・憫笑録」をはじめ、昭和10年頃に高橋が『精神分析』誌上に発表した作品には精神分析を切り口として社会時評や批判を展開したものが多い。

○**ジャーナリズムに迫る精神分析學—精神分析的探偵小説四つについて—** 昭和10年9・10月号、P.75～80

精神分析の社会的な浸透や各メディアでの露出の高まりに触れた上で、木々高太郎の『網膜脈視症』、水上呂理の『踵の衝動』および『精神分析』、清澤冽『精神分析をされた女の話』の四作品の作品解説を行うエッセイ。右の作品中では木々高太郎の『網膜脈視症』を「専門的に（分析學上でも、探偵小説としても）価値が高いであらう」と高く評価し、精神分析の応用が作品の娯楽価値を高めていると指摘する。なお、タイトルと異なりいわゆる報道としての「ジャーナリズム」にはほとんど触れていない。

○サディズムの藝術及社會への顕現 昭和10年11・12月号、P.23～31

従来分けられていたサディズムとマゾヒズムの一体性を説きつつ、周囲の人間に対する残酷な加虐を行った事で有名なマルキド・サド、豊臣秀次等の例を引きつつ、彼らがそうした行為を行ったのは“悪人”だったからではなく、無意識下におけるコンプレックスが作用したものだとしている。また、豊臣秀次の事例に関連して、谷崎潤一郎の『母を戀ふる記』や『春琴抄』に顕れた“谷崎自身の無意識面”を指摘する下りもある。こうしたサディズムやマゾヒズム的人物に対する社会的な抑圧は、結局のところ「變態現象」の解決にはならず、むしろそれらを無意識面に追いやる事で、やがては「意味ない闘争」や犯罪、邪宗の流行等の形で噴出すると警告している。そして「健康なサド・マゾヒズムの処理」が必要であることを訴え、その昇華手段として人々が己のうちに潜むサド・マゾヒズムを自覚した上で、芸術や技術、學術競争へと置換することを挙げている。論中で昭和9年9・10月号で発表した『性風俗の檢閲に就いて當局に訴ふ』と絡めた性技巧書の公刊・普及がサド・マゾヒズムの健康な昇華に寄与すると主張しており、同論と同じく戦後の「性科学者としての高橋鐵」の下地とも言うべき論文になっている。

○性格改造は精神分析によつてのみ—精神分析學のメモ— 昭和11年1・2月号、P.13～18

古典心理学による人間の形質的分類、また性格の先天的決定論をとりあげ、特に分類による性格分析の手法を「精々商品のカタログ帖にしか過ぎない」と

批判。その例として「ヒポクラテスの四體血液説」、「ユングの外向性内向性」、「ハイマンズとウィルマスやプラトネルは各々四氣質の混合型だの情緒性能動性感受性だのから八型説を發表」等を挙げる。その上で、無意識心理の研究を行うことでより本質的な性格の「カタログ」が類別できると主張し、今後は既存の社会において「性格改造」の役割を担ってきた宗教、道德といった抑圧に代わり、精神分析こそが「科學的抽出、科學的洗滌、科學的内省（自己分析）」によってその役割を担うであろうと指摘している。

○代表的煩悶 身の上相談分析解答見本帖 昭和11年1・2月号、P.70～75

『精神分析』誌上の読み物記事「アプフウブ」は、第2節でも取り上げたように大槻憲二が「不老院泉主人」の筆名でエッセイや時評を執筆した記事だが、高橋も本作を含め3回分を担当している。先の「心中自殺 憫笑録」と同じく、「黄表紙鐵輔」名義によって書かれている。高橋が読者3名の身の上相談に対して、精神分析に基づいた回答を行う形にはなっているが、それぞれタイトルが「『野崎村』のお光より」、「シベリヤの『復活』者より」、「龍宮より歸朝して」となっている事からも判る通り、それぞれ浄瑠璃『新版歌祭文』、トルストイの『復活』、そして昔話の『浦島太郎』からそれぞれ作中人物が出した身の上相談、という設定のいわばパロディ記事である。

○妖婦への感傷愛を析く 昭和11年3・4月号、P.16～24

唐の武后、古代ローマ皇帝妃メッサリーナからサロメ、クレオパトラ等「妖婦」（高橋の定義によれば、性目的を餌に男性を自滅させる女性の一性格）と呼ばれる古今の事例を題材に、彼女たちがなぜそういう行為をするのか（またさせられるのか）を意識面と無意識面から分析する。高橋の「発見」によれば、妖婦達の人生における重要な要素は、無意識中の「父コムプレックス」と「息子コムプレックス」の相克であり、愛人に熱烈な情愛を注ぐ理由はその相克によって父および息子の代償を求めるからであると説いている。同時に、今もさまざまな芸術創作の世界で妖婦が“人気”を集めるのは、男にとって彼女達が母代償であるからだとし、前述の「父-息子コムプレックス」に関連して、

妖婦の魅力とは即ち「遂げられし近親姦」であるからだ、としている。

○代表的煩悶 身の上相談分析解答見本帖 昭和11年3・4月号、P.73～76

前回に続いて、読み物欄『アブフウブ』の1コーナーとして執筆されたもの。名義は同じく黄表紙鐵輔。内容は「暴力団長の妾」である女性から寄せられた「かつての恋人への恋心と主人（暴力団長）との間で板挟みになっているが、どうすればよいか」という悩み相談とそれに対する高橋の回答。一見、普通の悩み相談の体裁になってはいるが、高橋の回答中に「しがねえ戀の情が仇」「お釋迦様でも知るめえが」などの台詞が混じっている事からも判る通り、三代目瀬川如臯による歌舞伎演目『与話情浮名横櫛』のヒロインお富から寄せられた投書、という設定のパロディ記事になっている。なお、高橋は“お富”に対し「貴女の眞心で愛人を正道に戻してから、貴方も妾業を清算し、堅實な愛を發展さすべきです。」とアドバイスしている。

○精神分析に依る廣告心理學の革命 昭和11年5・6月号、P.41～47

従来心理学による廣告術の限界を指摘し、新たに精神分析の手法を用いることで「新しい廣告」の創造が可能であると訴える、高橋鐵の「廣告論」とも言うべき論文。廣告の大きさと購買者への注意、購買欲喚起とは必ずしも比例しないことや、同じ廣告でも媒体（高橋が論中で挙げているのは新聞、バス車内、飛行機によるビラ投下）によってその受け取られ方と効果は異なることなどを述べている。また廣告とはすなわちコンプレックスや本能に対する誘惑（「本能を誘ふ暗示」）であり、それさえ成功すればあとは購買者に自己合理化のための“理由”を与えれば「精神分析による廣告工作の仕上げ」は完成するとしている。なお、第1節で述べたように高橋は昭和13年11月から一年間、新聞批評紙『現代新聞批判』上に、「鐵假面」の筆名で廣告時評コラムを執筆しており、この時期は後年彼の執筆の主軸となる性科学よりも廣告業界人としての活動に重きを置いていた傾向が見られる。

○映畫と精神分析學 昭和11年5・6月号、P.87～89

映画『モロッコ』（J・スタンバーグ監督、昭和5年）の魅力に「困難なるなる戀愛」と「現實よりの退行」の美にあるとした上で、同作に限らず映画においてはそのテーマばかりでなくその技法も、精神分析の援用による解釈が可能であると論じている。技法については、大寫（クローズ・アップ）は「外界の事象が我々の意識の要求に従順となつた」もので、「時に部分本能（窃視慾、フェチシズム）をも昇華させ」、溶明暗（フェードインアウト）は「〔記憶の出現と消去とを象徴してゐる〕ばかりでなく、屢々現實よりの引上げを果たす」と読み解く事ができるとしている。

○「心の水泡」抄—詩の眼・化學の眼— 昭和11年9・10月号、P.83～87

五つの題材を精神分析の視点から解釈・解説した読み物。

高橋は作中で湖畔に心惹かれる心境に胎内空想の投影を、ゴルフの打球に「自分の力と念願とを帯びた分ドツベルゲンゲル身」を、芭蕉や一茶の鶉を詠んだ俳句の中に、彼らの対象（鶉）との自己同一化を読み、そしてアンブトン・シンクレアの検閲禍のエピソードに秘匿を覆し暴露を望む「萬人の抱く強いコムプレクス」を、社会のスポーツへの耽溺に「精神發育の停止の快感」があるとし、社会のさまざまな行為や出来事に人々の無意識心理面が反映されていると述べる。昭和10年5・6月号の『雪山に誘はれむ願望』と同じく、論中でソーステイン・ヴェブレンの『有閑階級論』を援用している。

○現代青年に禍根を告げる—「思春期心理」の崩壊— 昭和12年1・2月号、P.31～38

（当時の）現代青年の傾向とその精神の分析論。高橋は、現代においてはかつて文芸等に描かれたような“青年の心”が崩壊しているとし、その原因として家族制度が崩壊し各人が“超自我”のモデルを喪失していること、同時に閉塞した社会に適応するために「強制された外向型」に仕立て上げられることで、真実の意味での“自我”、すなわち青年期心理を持たずに生きることを強いられるからであるとしている。そして家族制度崩壊の要因として“資本主義社会”の浸透を挙げている点は、昭和12年3・4月号掲載の『不良少年教化者

への公開状』と共通する論旨となっている。精神分析の用語がちりばめられた硬質の文章ではあるものの、論文というよりは高橋の若者観を披瀝したエッセイと言って良い。

○「流行現象」の無意識的意圖 昭和12年1・2月号、P.68～74

当時の流行語「ハリキル」をはじめ、社会的に流行する言葉、服飾、芸術、遊戯等の背景に潜む“無意識心理”を分析する論文。高橋は流行現象を「経済的土臺から發生する仇花」であると観測し、その仇花はすべて「隠された企圖のシムボル」であるとする。まずフランス革命期や日本の元文・元禄期等の服飾流行を事例に「流行現象は必ず優越者が彼等の階級的のムプレクスを昇華發散する一表現である」とし、流行の發明は「代攝的有閑階級」(有閑階級に仕える芸能・商人・奴隸等)が行い、それを「劣者」(一般大衆)が模倣することで資本主義社会における「利潤循環」の役割を果たしているとする。この社会的な模倣の理由として高橋は、一つに“優越者”と“劣者”間のサド・マゾ的錯綜、もう一つに集團無意識下の願望が補償されることを挙げている。そして優越者と劣者との間で流行による「社會的紐帶」が断たれるに至って「彼等のとる共通物質は消費的なものではなく武器そのものになる」と、流行現象の分析が、一般大衆の企圖(いわゆる“世論”)分析となりうることを説明している。

なお、本号で高橋は今作の他、別掲の『現代青年に禍根を告げる』および『「築地」よハムレット根性を捨てよ』を含めた三本の論文、時評を掲載している。

○「築地」よハムレット根性を捨てよ—シルレル及びシルレル愛好の分析—
昭和12年1・2月号、P.86～90

高橋は、昭和11年11月9日に、新劇劇団「築地」の公演『群盜』(シラー原作)を、東京精神分析学研究所の講習会会員一同とともに観劇している^(※5)が、その際の感想をもとにした演劇批評。シラーおよびその作劇法の無意識心理を分析した上で、“天才”であることは認めつつも「社會變革期に

揺ぐ思春期妄想の上層建築が設工した代表者に外ならぬ。アダム・スミスを唄ふハムレットに外ならぬ。」と、その非現代性を批判した。同時に、この演目を選んだ「築地」に対しても「經濟闘争の純理をみずして、不合理社會なる大蛇に刃向ふ盲の小蛇であらう。」(P.89)と(本論の結びには「愛するが故に苛酷に」とあるものの)非常に低い評価をしている。なお、同号の研究会例会報告では、『群盜』観劇時の分析批評分を高橋が朗読し、それがそのまま本作として掲載されたことが記されている。(P.120)

○不良少年教化者への公開状 昭和12年3・4月号、P.76～79

『精神分析』同号の「不良少年少女心理」特集の中で書かれたもので、不良少年の教化と処遇に対してはその“親”が重要なカギとなっているという一般的な論に賛同しつつ、それは単に宗教者等を親の代替とするだけではだめで、精神分析学に基づき「親に對する能動的心理(性格形成に及ぼす意義)をも考慮すべき」と説く教育論エッセイ。また現在における不良少年の増加は、資本主義的經濟機構の浸透とその破綻が(主に經濟力によってその裏付けが図られる)親の權威を失墜させ、少年たちから超自我を奪い欲望充足のみが暴走する結果を招いたことが原因であると指摘。さらに既存の犯罪心理学への批判を行いつつ、不良少年教化に携る教育関係、法曹関係の人々へ「健全な超自我を持ち、(少年にとっての)超自我の模型となるべき」であり、少年たちの心を科学的な手段一すなわち、精神分析学—によって分析し昇華させるべきだと提言している。資本主義經濟(とその破綻)が社会問題發生の要因であるという視点はこのころの高橋の作品上に共通して提出されており、前述の通り昭和12年1・2月号掲載『現代青年に禍根を告げる—「思春期心理」の崩壊—』でも同様の論旨が見られる。

○象徴形成の無意識心理機制 昭和13年1・2月号、P.2～31

高橋鐵が第2回(昭和12年度)フロイド賞を受賞した際の対象論文となった作品。稿末に「亡父へ償ふ念ひにて脱稿」(P.31)と、前年の七月に死去した父親に捧げる論文として掲載された。

「すべての心理活動は古往今来すべてみな象徴性の無意識的形成を経て」、すなわち人間の無意識心理が抑圧作用によって象徴化されると指摘したもので、文化現象や作品として表れる一時的象徴はその無意識面のメカニズムによって形成されることを「花」・「蛇」・「水」・「飛行」等様々な表象を扱った古今の芸術作品や事例を挙げながら論じたもの。高橋の他論文と比較して先行研究や著作での言及を丹念に拾っているのも特徴で、「師」である大槻憲二や、東京精神分析学研究所会員でフロイド賞のスポンサーとなった公爵・岩倉具榮らの研究も引かれており、特に「大槻氏の所説による象徴の三意味」の章（P. 23～26）では、象徴に代償・転位・還元の意味があるとする大槻説を引用しつつ、彼のハブロック・エリスの「足フェティズム」に関する考察に修正を加えている等、各所で大槻説の補強と解釈を行なっている点から見て、高橋が当初から「フロイド賞」を強く意識し執筆した作品であると思われる。

ただし後半になるに従って無意識象徴の例を古典文学作品等から引用する雑学的、エッセイ的な内容（高橋の作品によく見られる傾向であるが）に傾き、目的として掲げた無意識象徴の形成メカニズムについての考察を論じ切れていない、いわば“竜頭蛇尾”的な構成になってしまった面が見られる。本稿「はじめに」でも述べたように、この論文による「フロイド賞受賞」を高橋は生涯の勲章としたが、にもかかわらずで門人の鈴木敏文が「どうしても腑に落ちぬ」と指摘するように^(※6)高橋は戦後の著書のいずれにもこの『象徴形成の無意識心理機制』を収録していない。その事情については種々憶測が可能であるが、本稿筆者としては前述したような内容・構成上の“弱点”を高橋自身も気付いていた、もしくは内容における学術的な批判を避けるためにあえてそのようにしたのではないかと考えている。

○賭博の心理 昭和14年1月号、P.70～76

特高警察の留置所に入れられた「私」が、留置所内で飯粒を捏ねて作ったサイコロで賭博にふける人々を見ながら、「なぜ人は賭博に夢中になるのか」について思いをめぐらせる短編小説仕立ての構成をもったエッセイ。高橋の他の論文・エッセイと同様に古今の様々な著名人や菊池寛、ドストエフスキーの作

品等文学作品からも事例が引かれ、賭博が人の心をつかむのは、無意識下において実生活の模倣、演劇化、そして予行練習の意味合いを持ち、かつそこに（いかさまの存在はあるにしろ）一定の「成功」の可能性が存在するからであると論じている。この作品における「私」は、「友人の思想事件に引掛つて心理學教室からいきなり此處に突入れられた彼は、元來東京土着の株屋の子だつた為」（P.70）といった設定描写から、高橋鐵本人の経歴や体験をある程度投影したものと考えられる。また、彼は昭和9年の研究会12月例会で「サイコロ・サイコロジ（賭博の心理）」についての研究談を話しており（第5節表1を参照）、構想の関連が伺われる。

○精神病者を描いた文學 昭和14年9月号、P.38～45

高橋本人による『蕃女の涙石』、『空に臥る女』、『氷人創生記』等の小説創作の狙いを「神話伝説の近代化」と「精神分析的探偵小説」の確立を目指したものであると自解する前半部分、さらに精神分析学を使った文学作品および登場人物解釈の可能性について触れる後半部分に分かれるエッセイ。後半部分ではガルシンの『紅い花』、江戸川乱歩の『鏡地獄』、モーパッサンの『エルメ夫人』、長谷川如是閑の『奇妙な精神病者』を挙げ、それぞれの作品に登場する「精神病者」を分析している。高橋鐵が『精神分析』誌上に発表した最後の論文となった。前半は高橋が自身の小説作品と『精神分析』および東京精神分析学研究所で得た知識との融合を図ろうとしていたこと、少なくとも一時期は「小説家」として活動していく意志があったことを示す興味深い言及であると言える。なお、このエッセイは昭和31年に出版された高橋の著書『フロイト眼鏡』にも、タイトルを「精神病文学論」と変更し『精神分析』関連箇所削除等の変更をした上で収録されている。

【第3節 注記】

- ※1 和田芳恵『ひとつの文壇史』（新潮社、昭和42年）など。なお、和田は前掲書中で、高橋鐵が『オール讀物』に短編小説『怪船人魚號』（昭和13年11月号）、『交霊鬼懺悔』（同12月号）をそれぞれ掲載したときの

橋渡しをしたと証言している。

- ※2 『三島海雲をしのぶ一生誕百年記念一』（カルピス食品工業株式会社、財団法人三島海雲記念財団、パンピー食品株式会社、三島食品工業株式会社、昭和52年）
- ※3 該当のキャッチコピーを使った宣伝立案等に関わった可能性は残されているため、今後の調査課題としたい。なお、高橋が加入した翌年の昭和10年9・10月号から、都合4回にわたって『精神分析』巻末にカルピスの商品広告が掲載（昭和11年4・5月号、昭和12年1・2月号、昭和13年7月号）されており、高橋鐵とカルピス宣伝部とは退社後もなんらかのコネクションがあった可能性が高い。こちらも引き続きの調査課題としたい。
- ※4 私見であるが、これは正規に流通するあらゆる出版物が内務省の検閲を免れない状況（出版法第三条：書図画ヲ出版スルトキハ発行ノ日ヨリ到達スヘキ日数ヲ除キ三日前ニ製本二部ヲ添ヘ内務省ニ届出ヘシ）下においては、ある種の現実的な「穏当さ」であったと見る事もできよう。実際に『精神分析』も（高橋に関連したものではないが）、昭和14年3月号が内務省から「削除命令」を受け101～108ページを落としたまま刊行する事態に見舞われている。
- ※5 昭和12年1・2月号の118ページに「本研究所講習會會員は十一月九日夜築地小劇場に、シルレル作『群盜』を總見し、觀劇後銀座西ヤンキー喫茶店にて分析合評會を催した。」との記述がある。
- ※6 『性の伝道者 高橋鐵』P.63。

第4節 東京精神分析学研究所の研究会、講習会の表および付記

本節では、高橋鐵が入会して以降の東京精神分析学研究所の研究会、講習会報告記事から、研究会例会については『精神分析』誌上に記事記載のある昭和8年12月例会（同年12月15日開催）から昭和16年1月例会（同年1月27日開催）までの記事を表1-1として、同じく講習会例会については昭和9年

11月例会（同年11月5日開催）から、昭和16年2月例会（同年2月3日開催）までの記事を表1-2として掲載している。基本的に各例会の開催日時、場所、また高橋鐵の発言や発表内容等を一覧表の形でまとめたものである。

次に、昭和8年11月の高橋鐵入会以前に開かれた研究会で『精神分析』誌上に情報が掲載された「昭和6年6月22日開催分より昭和8年11月14日開催分までの研究会例会」を参考のため、表2として掲げた。なお、同期間内に掲載情報があったのは研究会のみで、講習会の開催報告はない。またこちらでは、発言発表者および確認できる出席者と人数が判明している研究会が多いためその内容も記載している（報告記事内での発表や発言については、内容が原文内で箇条書きしてあるものはその表記通りに、そうでないものについては櫻庭が適宜まとめた（文頭に■がついたもの））。表中、「出席の情報のみ」とある箇所は、高橋の発言等はなく、ただ出席した事実のみが判明している回である。

なお、昭和6年6月22日以前のものについては研究所に記録が残っていない^(※)。また、同期間中に開催報告があるのは研究会のみで、講習会は開催されていない。

【第4節 注記】

※昭和8年5月号（創刊号）57ページに「研究所存立頭初より續行せられたるものなれど、只今假りに、昭和六年六月以降の業績を掲ぐ。（それ以前のものは記録の保存なきを以て暫く略す。）」とある。

表 1-1 高橋鐵入会以後の研究会例会

年	例会名	日付	開始時刻	場所（記事中表示ママ）	
昭和9年	12月例会	昭和8年12月15日	17:30～	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	1月例会	昭和9年1月17日	夜	神田驛前アメリカン・ベーカリー	
	2月例会	昭和9年2月15日	17:30～	神田萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	3月例会	昭和9年3月16日	夜	萬世橋アメリカン・ベーカリー	
	4月例会	昭和9年4月16日	17:30～	神田驛前アメリカン・ベーカリー	
	5月例会	昭和9年5月14日	時刻記載なし	アメリカン・ベーカリー	
	6月例会	昭和9年6月14日	時刻記載なし	アメリカン・ベーカリー	
	7月例会	昭和9年7月17日	17:30～	神田驛前アメリカン・ベーカリー	
	9月例会	昭和9年9月17日	17:30～	日比谷美松屋百貨店五階貴賓室	
	10月例会	昭和9年10月16日	記載なし	日比谷美松屋百貨店五階貴賓室	
	11月例会	昭和9年11月19日	夕	日比谷美松屋百貨店五階貴賓室	
	12月例会	昭和9年12月17日	夕	日比谷美松屋百貨店地下室食堂別室	

	高橋鐵の発言、発表等	備考、特記	高橋鐵出席	掲載号およびページ
	「十五日（金）、午後五時半から例に依り萬世橋驛前アメリカンペーカりに開く。食後、大槻憲二氏立つて新來の方々を紹介し次いでそれ等の方々の感想を伺ふことが出来た。 (中略) 一、日本大學心理學科出身、(従つて下山善高氏の先輩)の高橋鐵氏立つて、氏の性格學や商業心理學の方面から、精神分析學に興味を持つに至つた所以を語られた。」	高橋鐵が初めて参加。	○	昭和9年1月号、P.92~93
	「その後は、博覧にして雄辨なる中山太郎氏に物を訊く座談會の如き形となつたが、長谷川誠也氏の『おめこ餅の話』や高橋鐵氏の『喧嘩の效用』論も、その間に座を賑はせた。」		○	昭和9年2月号、P.93
	高橋は出席の情報のみ。詳細はなし。		○	昭和9年3月号、P.98
	「第四番目に、高橋鐵氏は『嘘の心理』に就いて、四月フルの話から、笑話、小話に至るまで東西古今の幾多の實例を擧げて、甚だ才氣豊かな研究談を試みられた。 第五に大槻憲二氏は、高橋氏の擧げた實例の一つを契機として無意識論理と意識論理との區別に就いて、組織的に所感を語られ、民俗學の研究方法にも言及せられた。」		○	昭和9年4月号、P.96~97
	「最後に、高橋鐵氏、大槻氏の本誌先號所載『愛染』分析評に就いて、二三の質問を大槻氏に試み、長谷川氏代つてそれに答辨を與へられた。高橋氏は大槻氏の『愛染』評に、非常に『感激』せられたさうである。」		○	昭和9年5月号、P.100
	出席情報のみ、詳細はなし。		○	昭和9年7、8月号、P.104
	出席情報のみ、詳細はなし。		○	昭和9年7、8月号、P.104
	「高橋鐵氏、『英雄色魔とその心理』に就いて研究発表あり。眞の色魔は「ネクタイの如く女から撰擇されるものではない」などの啖呵あり。それに就いて、かゝる問題の研究に入つた高橋氏個人の心理的動機について質問を發する向あり、またその心理に對する分析解釋を下す向きあり。なかへ愉快であつた。」		○	昭和9年9・10月号、P.101
	「まづ高橋鐵氏『精神分析的機智論より見たる江戸小話』に就いて、非常に機智的な研究談があつた。」	平塚らいてうが初参加。記念写真にも前列左端(高橋は同左より4番目)に写っている。	○	昭和9年11・12月号、P.92~93
	「次に高橋鐵氏、古今東西の藝澤家の珍談を數多く上げてその心理を考察し」		○	昭和9年11・12月号、P.93
	「續いて高橋鐵氏は「洒落の研究」と題して種々の洒落の實例を擧げてそれを分類し、興味ある話材を提供せられた。」		○	昭和10年1・2月号、P.110~111
	「最後に、毎回面白い話をする高橋鐵氏立つて「サイコロ・サイコロヂー(賭博の心理)」「別世界へ逃避の心理」に就いての例の機智縦横なる研究談があつて、散會は十時過ぎであつた。」		○	昭和10年1・2月号、P.111

年	例会名	日付	開始時刻	場所（記事中表示ママ）	
昭和10年	1月例会	昭和10年1月21日	17:30～	神田ベーカリ (他の表記不統一と同様、通例会場の「萬世橋驛前アメリカン・ベーカリ」と思われる。以下同じ)	
	2月例会	昭和10年2月18日	17:30～	神田ベーカリ	
	3月例会	昭和10年3月18日	夜	神田ベーカリ	
	4月例会	昭和10年4月15日	夜	神田ベーカリ	
	5月例会	昭和10年5月20日	夜	神田愛光舎階上	
	6月例会	昭和10年6月17日	夜	神田驛前アメリカン・ベーカリ	
	7月例会	昭和10年7月15日	時刻記載なし	神田驛前アメリカン・ベーカリ	
	8月例会	昭和10年8月14日	夜	アメリカン・ベーカリ	
	9月例会	昭和10年9月9日	夜	アメリカン・ベーカリ	
	10月例会	昭和10年10月14日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリ	
	11月例会	昭和10年11月18日	夜	萬世橋アメリカン・ベーカリ	

	高橋鐵の発言、発表等	備考、特記	高橋鐵出席	掲載号およびページ
	「統いて大槻憲二氏の研究談「變態性慾の話」があり、種々質問があつた。次に長崎文治氏の「宗教に就いて」の談があり、それに就いて高橋鐵氏の質問があつた。高橋氏は宗教無用論を唱へ、長崎氏は分析學の洗禮を経たる新たな宗教を必要とすると云ふ立場をとつた。」		○	昭和10年3・4月号、P.100
	「まづ、最初に土屋喜一氏が苦心の大論文「不安の克服」を朗讀せられて人々の批評を乞はれた。これは精神分析學と唯物辨證法との調和を企てた野心的な論文であつて、本誌次號にその改訂せられたる全容が表されるであらう。高橋鐵氏との間にそれに就いて二三の討議が交わされた。 (中略) それに暗示を得て長谷川氏續いて立つて、「ホワイトヘッド氏の數學觀」に就いて科學思想に於ける創作的見解の新機運を紹介せられた。立川、高橋、大久保眞太郎、土屋の諸氏はそれに就いて質問又は批評するところがあつた。 高橋鐵氏續いて、「スキーの精神分析」と題して、雪と遊ぶ心理を細緻に分析し、大槻氏それに刺激せられて「死神としての美人」に就き偶感を述べられ、霜田静志氏はセガンチニの分析觀を暗示せられた。」		○	昭和10年3・4月号、P.100～101
	「第三に、高橋鐵氏、これは分析漫談に類するものであると辨解しつ、「八百屋お七の放火心理」に就いて述べられた。」		○	昭和10年5・6月号、P.96～97
	「續いて、高橋鐵氏は「芭蕉の俳句及び人格について」各方面からの精緻な分析談があつた。」		○	昭和10年5・6月号、P.97
	出席情報のみ、詳細はなし。		○	昭和10年7・8月号、P.102～103
	「その他幼児時代の種々な經驗に就いて、小野田幸雄、富田義介、高橋鐵氏等が話された。」		○	昭和10年7・8月号、P.102～103
	「第三には高橋鐵氏の「酩酊心理の型」に就いて漫談的な談があつた。」		○	昭和10年9・10月号、P.99～100
	「名映畫分析鑑賞と講演の會」の打ち合わせに終始。高橋も出席。同会については第5節参照。	例年8月例会は行われませんが、この年は10月5日の映画講演會の打ち合わせのため開催	○	昭和10年11・12月号、P.100
	出席情報のみ、詳細はなし。	10月5日の映画講演會の打ち合わせ	○	昭和10年11・12月号、P.100～101
	出席情報のみ、詳細はなし。ただし、「高橋鐵氏門下、長田耕一氏」が臨時出席したとの記述がある。	映画講演會の慰勞会を兼ねる。	○	昭和10年11・12月号、P.101
	出席情報のみ、詳細はなし。ただし、「高橋鐵氏門下、小林一氏」が出席したとの記述がある。	早稲田大学実験心理学教室の戸川行男による「メスカリン（さぼてん様の同名植物よりとれる薬品）麻酔液注射に因る反應としての幻覺實驗の報告」がある。	○	昭和11年1・2月号、P.93～94

年	例会名	日付	開始時刻	場所（記事中表示ママ）	
	12月例会	昭和10年12月16日	夜	アメリカン・ベーカリ	
昭和11年	1月例会	昭和11年1月20日	夜	アメリカン・ベーカリ	
	2月例会	昭和11年2月17日	夜	アメリカン・ベーカリ	
	3月例会	昭和11年3月16日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	4月例会	昭和11年4月20日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	5月例会	昭和11年5月18日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリ	
	6月例会	昭和11年6月15日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリ	
	7月例会	昭和11年7月17日	時刻記載なし	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリ	
	9月例会	昭和11年9月21日	夜	アメリカン・ベーカリ	

	高橋鐵の発言、発表等	備考、特記	高橋鐵出席	掲載号およびページ
	「食後、初來會者（早大國文科在學金原達吉氏）の紹介があり、續いて北垣照雄氏立つて、「現代人のニヒリズムに就いて」研究談があつた。氏は學生や青年間のニヒリズムの原因を試験地獄と就職難とマルクシズム彈壓とに歸せられた。これに対して高橋鐵氏社会分析専攻家としての批評があり、また畫家の作品が要するに母イマゴの投出にあるとの北垣説に就いては大槻氏の敷衍があつた。」		○	昭和11年1・2月号、P.94
	「次に高橋氏立つて「妖婦の本質とその實例に就いての考察」を試みられたのが、妖婦、毒婦、淫婦などに就いての區別を明白にする必要はないかとの質問もなつたが、その區別は心理學上からは必ずしも重大ではなからうとの意見が諸氏から洩られた。長崎、高橋兩氏の研究談は今夕の討議の結果を参照し、推敲洗練せられて、本誌本號の卷頭を飾つてゐる。」		○	昭和11年3・4月号、P.103
	「食後、司會者立つて當夜の初出席者、南葵教育會勤務山本敏一氏、奥田裁縫女學校奥田艶子女史竹田浩一郎夫人、米子女史、竹田氏友人久保田久美子夫人等を紹介せられた。 (中略) 次いで奥田校長立つて、女史が今日の立身はみな夢の暗示に負ふものであることを縷々として説かれたが、それは正しくは夢と云ふよりは女史の行動の無意識的動機を直觀的な形で披瀝せられたものであつた。 それに對して長崎文治氏、田内長太郎氏、高橋鐵氏、土屋喜一氏、竹林松代氏、大槻憲二氏、山本敏一氏、竹田浩一郎氏等立つて種々なる見地から學術研究會らしい無遠慮さで批評やら解説やらを試みられた。」		○	昭和11年3・4月号、P.103～104
	「本日は、高橋鐵氏が人類の種々な空想に就いての研究報告をせられると云ふ豫報があつたが、急に都合あしく缺席せられることになつたので、大槻憲二氏次に立つて沙翁の「ハムレットに於ける黒の問題」に就いて色彩象徴の研究を発表せられた。」		×	昭和11年5・6月号、P.93
	出席情報のみ、詳細はなし。		○	昭和11年5・6月号、P.93～94
	出席情報のみ、詳細はなし。		○	昭和11年7・8月号、P.88
	「高橋氏は目下巷間流布せられてゐるお定關係の川柳や諧謔を紹介せられた。その一つは例へば「お定は無罪になるだろう。何となれば、事實無根だから」と云ふが如き……。これは機智として相當な出来である。」		○	昭和11年7・8月号、P.88～89
	出席情報のみ、詳細はなし。	※この号では、関係者が多忙・病氣のため詳細報告が無いことを謝罪する文章が掲載されている。	○	昭和11年9・10月号、P.95～96
	新來者の秋山尚雄を紹介。		○	昭和11年11・12月号、P.104

年	例会名	日付	開始時刻	場所（記事中表示ママ）	
	10月例会	昭和11年10月19日	夜	アメリカン・ベーカリー	
	11月例会	昭和11年11月16日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	12月例会	昭和11年12月21日	夜	アメリカン・ベーカリー	
昭和12年	1月例会	昭和12年1月15日	夜	アメリカン・ベーカリー	
	2月例会	昭和12年2月15日	夜	アメリカン・ベーカリー	
	3月例会	昭和12年3月15日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	4月例会	昭和12年4月19日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	5月例会	昭和12年5月17日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	6月例会	昭和12年6月21日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	

	高橋鐵の発言、発表等	備考、特記	高橋鐵出席	掲載号およびページ
	出席情報無し。欠席の模様。		×	昭和11年11・12月号、P.104～105
	「食後、高橋氏は（別項報告の通り）築地小劇場に總見したるシルレル原作『群盜』の分析批評文を朗讀して一同の批評を乞はれた。一同異議なきこととなつて、御覽の通り、本號時評欄にそのまゝ掲げられてゐる。」 「最後に高橋氏も思春期の問題について研究論文を朗讀せられた。本號研究欄のものはその加筆淨書せられた結果である。」	※ 118 ページに「本研究 所講習會員は十一月九日 夜築地小劇場にシルレル 作『群盜』を總見し、觀 劇後銀座西ヤンキー喫茶 店にて分析合評會を催し た。」との記事あり。 この際高橋が朗讀した研 究論文は、第3節にて紹 介した「『築地』よハムレ ット根性を捨てよ」(昭和 12年1・2月号掲載)である。	○	昭和 12 年 1・2 月号、P.119～ 120
	「續いて、本夕の主題に入り、高橋氏まづ不良少年の心理に就いての話があつたが、それに對して長崎文治氏不良少年の定義について質問があつた。」		○	昭和 12 年 3・4 月号、P.106～ 107
	「續いて、武田忠哉氏立つて、氏が得意の題目たる「ノイエザハリヒカイト」に就いて久しき研究の結果を発表せられた。これに對して大槻氏は精神分析學との關係に就いての説明を要求せられ、高橋鐵氏其他から批評があつた。」 「次に長崎文治氏の不良少年論があり、その内懲罰無用の主張があつたので、それに對して大槻氏、高橋氏から疑問が發せられ、霜田氏は懲罰?對無用論に讀せられたが、木村氏、富田氏は折衷説をとられた。」	長崎文治の第1回フロイド賞祝賀會と併催	○	昭和 12 年 3・4 月号、P.107
	「本夕は『生理と心理』との研究題目が掲げられてあるに基き大槻氏まづ立ち、『精神分析學と條件反射』の關係につき、米國の分析學者パウル・シルダー氏の研究紹介が試みられた。その内に言及せられてゐるロシアの條件反射學徒イシュロンドスキーの分析觀に就いて、長崎氏、續いて立つて紹介をせられた。それについて、大脳生活との關係につき、木村廉吉氏、高橋鐵氏、塚崎茂明氏等の間に討議が交わされた。」 「次に高橋氏は「上田秋成の分析」の未定稿を発表せられ、續いて直ちに現代少女の男性觀について述べられた。」		○	昭和 12 年 3・4 月号、P.107～ 108
	「食後、高橋鐵氏、「心理學徒としての精神分析學」に就いて、精神分析學と他の心理學との關係諸點を明かにし、その相互幫助を要望せられた。それに對して、長崎文治氏から質問が發せられ、二三の應酬的討議があつた。論は體質と素因との區別に互り、木村氏精神病學の説を引用してその別を明にせられた。」		○	昭和 12 年 5・6 月号、P.109
	「高橋氏續いて立つて「服飾の精神分析」の題下に種々警拔の觀察を述べられ、喝采を博した。」		○	昭和12年7・8月 号、P.100～101
	「食後、高橋鐵氏は「ひげの研究」の題下にその心理分析を試みられた。」		○	昭和 12 年 7・8 月号、P.101
	「續いて高橋鐵氏は「服飾について」分析的觀察を下され、式場氏は「下手物愛玩の心理について」座談せられた。」(P.111 上段) 「高橋氏はまた續いて「諸國お土産」に就いて例により才氣ある分析觀察を下され、大槻氏はまた最近取扱はれた「或る強迫症神經症患者の場合」につき報告せられた。」(P.111 下段)		○	昭和 12 年 9・ 10月号、P.111

年	例会名	日付	開始時刻	場所（記事中表示ママ）	
	7月例会	昭和12年7月19日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	9月例会	昭和12年9月24日	夜	アメリカン・ベーカリー	
	10月例会	昭和12年10月18日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	11月例会	昭和12年11月15日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	12月例会	昭和12年12月20日	17:00～	神田萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
昭和13年	1月例会	昭和13年1月17日	夜	アメリカン・ベーカリー	
	2月例会	昭和13年2月22日	夜	アメリカン・ベーカリー	
	3月例会	昭和13年3月23日	17:30～	アメリカン・ベーカリー	
	4月例会	昭和13年4月18日	時刻記載なし	アメリカン・ベーカリー	
	5月例会	昭和13年5月16日	夜	アメリカン・ベーカリー	
	6月例会	昭和13年6月20日	17:30～	萬世橋アメリカン・ベーカリー	
	7月例会	昭和13年7月18日	夜	アメリカン・ベーカリー	

	高橋鐵の発言、発表等	備考、特記	高橋鐵出席	掲載号およびページ
	「次に高橋鐵氏は「若妻殺し」に就いてその社会分析を試みられ、塚崎茂明氏は「殺人心理の分析」三件に就いて所感を語られた。」		○	昭和12年9・10月号、P.111～112
	「第三に高橋氏は力篇「象徴形成論」を述べられて批評を乞はれた。長崎文治氏その他から二三の質問があつて、高橋氏これに答へられた。何れ同論文は本誌次號の巻頭に掲げられることになつてゐる。」		○	昭和12年11・12月号、P.106～107
	「食後、高橋鐵氏は前回發表の『象徴論』の後半を發表せられた。一同異議なく、大槻氏も「種々教へられるところ多かつたことを謝」せられた。その原稿は即ち本號巻頭を飾つてゐる。」		○	昭和13年1・2月号、P.111
	「大槻氏の勧めにより、高橋鐵氏まづ最近作小説『交霊鬼懺悔』につき、その分析學との交渉點を解釋せられた。本號時評欄の倉橋氏の批判はまた倉橋氏獨自の見解あつて、作者をも鑑賞者をも裨益するであらう。(※「裨益」は原文ママ)」		○	昭和13年1・2月号、P.111～112
	出席情報のみ、詳細はなし		○	昭和13年4月号、P.4～5
	「食後、フロイド賞贈與式に於ける高橋氏の挨拶に續き、最近、成女學校長の榮職に就かれた宮田齊氏に對して新校長としての所感を要望する向きが多かつたので、同氏は立つて偶感を述べられ、分析學の今後の應用を聲明せられた。」(贈与式の様子については第5節本文を参照)	高橋鐵の第2回フロイド賞贈与式と併催	○	昭和13年4月号、P.5
	「次いで高橋鐵氏は處女性の問題に關係ありとして自作論文を朗讀して會員の批判を乞はれたが、淨留瑠、おさん茂衛門その他は殊に人々に印象するところ深かつた。」 また、倉橋久雄の『柿實る』(昭和13年3・4月号掲載の戯曲)の第二場を担当して朗讀し、作者の分析意図について言及。第一場は大槻憲二が担当。		○	昭和13年4月号、P.5～6
	宮田茂子による一茶の性格研究に對し、「彼の臆病なくせいに過激な性格に就いては、富田義介氏これを死の本能より説明せんとし、高橋氏はエディポス・コムプレクスから説明せんとせられた。」		○	昭和13年5月号、P.85
	「次に、高橋鐵氏色彩心理に就いての自家の調査の結果を報告せられ、久しく忌避せられてゐた黄色が近頃に入り頓に人氣を得て來たらしい風潮に就いての解釋を求められた。話はなほ衣裳の事、帶の事にも及んで行つた。」		○	昭和13年6月号、P.4～5
	「なほ岩倉具榮、高橋鐵兩氏からは丁重な缺席挨拶があつた。」		×	昭和13年7月号、P.96～97
	「最後に、高橋鐵氏分析小説自作「瀧夜叉デモニアック」を朗讀せられ、十時頃散會となつた。」		○	昭和13年8月号、P.5
	出席情報のみ、詳細はなし		○	昭和13年9月号、P.97

年	例会名	日付	開始時刻	場所（記事中表示ママ）	
	9月例会	昭和13年9月19日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカーリ	
	10月例会	昭和13年10月17日	夜	アメリカン・ベーカーリ	
	11月例会	昭和13年11月21日	夜	萬世橋アメリカン・ベーカーリ	
	12月例会	昭和13年12月19日	夜	アメリカン・ベーカーリ	
昭和14年	1月例会	昭和14年1月16日	夜	萬世橋驛前アメリカン・ベーカーリ	
	2月例会	昭和14年2月20日	夜	アメリカン・ベーカーリ	
	3月例会	昭和14年3月20日	夜	アメリカン・ベーカーリ	
	4月例会	昭和14年4月17日	17:30～	アメリカン・ベーカーリ	
	5月例会	昭和14年5月15日	夜	アメリカン・ベーカーリ	
	6月例会	昭和14年6月19日	夜	アメリカン・ベーカーリ	
	7月例会	昭和14年7月17日	夜	萬世橋畔アメリカン・ベーカーリ	
	9月例会	昭和14年9月18日	夜	アメリカン・ベーカーリ	
	10月例会	昭和14年10月16日	夜	「萬世橋畔の例月の會場」にて。 おそらく萬世橋驛前アメリカン・ベーカーリと思われる。	

	高橋鐵の発言、発表等	備考、特記	高橋鐵出席	掲載号およびページ
	「次いで高橋鐵氏は氏が特別に興味を持つてゐられる、平賀源内に就いて平生の所感を述べて、列席者の分析的批判を求められた。彼は詩的な山師と云はれ、エレキや火流布を發明したり「神靈矢口波」の劇を書いたり、多方面の鬼才であつたが、さうして反逆精神の内的一生を終へた人であつたが、さう云へば高橋氏にもさう云ふところがあり、高橋氏の源内への同一化も問題となつた。」		○	昭和13年11月号、P.99
	出席情報無し。欠席と見られる。		×	昭和13年12月号、P.5
	「次に高橋鐵氏立ち「清貧の心理」について廣汎な觀察を述べられた。清貧の名に依り消極主義に逃込むことを戒めたものであるが、これは分析者としては自明のことである。」 「高橋氏の談の中に川柳「儲けたい話のあとの大あくび」と云ふのが引用せられたのを契機として、あくびの生理についての疑問が宮田齊氏から提出せられ、その方の専門たる小山良修氏は迷走神経と交感神経との別について説明を興へられた。」		○	昭和14年1月号、P.103～104
	出席情報のみ、詳細はなし。		○	昭和14年2月号、P.7
	「なほ當日の研究談は、(中略)高橋鐵のチャプリン論、大槻氏の心理經濟法に關する研究などあり。」	フロイド賞授賞式と併催	○	昭和14年3月号、P.93～94
	出席情報のみ、詳細はなし。		○	昭和14年4月号、P.7
	出席情報のみ、詳細はなし。		○	昭和14年5月号、P.88～89
	出席情報のみ、詳細はなし。		○	昭和14年6月号、P.7
	「なほ、岩倉具榮、倉橋久雄、高橋鐵の諸氏からは鄭重な缺席挨拶があつた。」		×	昭和14年7月号、P.85
	「次に、高橋鐵氏は「精神病者の文學」に就いて述べられ、世界文學中にて精神病者を取扱つた數々の作品を擧げて分析的解説批評せられた。」		○	昭和14年8月号、P.7
	「食前、司會者から前號雜誌所載の「語彙」に就いての解説があつた。その内に癲癩への言及があつたので、暫く癲癩に就いての論に花が咲いた。この病気の發作のある時に頭に草履を載せると發作が納まると云はれてゐるのはどうしてであらふかと云ふ質問が高橋鐵氏から提出せられたが、もしそのやうな効果があるとすれば、それはそのやうな侮辱が本人の超自我の自我呵責を必要とせぬやうになるので、發作は一時的に納まるのではないであらうかと大槻氏は答へられた。」		○	昭和14年9月号、P.85
	出席情報あり、詳細なし。		○	昭和14年11月号、P.80
	「田中虎男氏は高橋鐵氏も日本人がスパイのトリックにかゝり易いと云ふ實例を擧げて家族主義に疑義を挾まれた。」		○	昭和15年1月号、P.75～76

年	例会名	日付	開始時刻	場所（記事中表示ママ）	
	11月例会	昭和14年11月20日	夜	「同会場」とあるため、萬世橋驛前アメリカン・ベーカリーと思われる。	
	12月例会	昭和14年12月18日	夜	萬世橋畔アメリカン・ベーカリー	
昭和15年	1月例会	昭和15年1月15日	17:30～	萬世橋驛前アメリカン・ベーカリー	
	2月例会	昭和15年2月19日	夜	アメリカン・ベーカリー	
	3月例会	昭和15年3月18日	時刻記載なし	アメリカン・ベーカリー	
	4月例会	昭和15年4月15日	夜	アメリカン・ベーカリー	
	5月例会	昭和15年5月20日	夜	神田アメリカン・ベーカリー	
	7月例会	昭和15年7月15日	夜	神田アメリカン・ベーカリー	
	9月例会	昭和15年9月16日	夜	神田驛前アメリカン・ベーカリー	
	11月例会	昭和15年11月18日	夜	神田アメリカン・ベーカリー	
昭和16年	1月例会	昭和16年1月27日	夜	アメリカン・ベーカリー	

	高橋鐵の発言、発表等	備考、特記	高橋鐵出席	掲載号およびページ
	出席情報あり、詳細なし。		○	昭和15年1月号、P.76
	「その後、大槻岐美氏は近頃、讀んだゾーデルマンの『憂愁夫人』の心理内容を紹介せられ、またそれに聯關して映畫『殘菊物語』が話題に上り、大槻、長尾、宮崎、富田、高橋の諸氏が種々の角度からこれを批評せられた。』		○	昭和15年2月号、P.7
	出席者名、記念写真中に高橋鐵の名前無し。欠席の模様。	昭和14年度フロイド賞授賞式と併催。	×	昭和15年3月号、P.89
	「出席者は定連十氏であつた。」との記載。高橋の出席有無は不明。		不明	昭和15年4月号、P.8
	欠席挨拶があつた旨記載。詳細なし。		×	昭和15年5月号、P.90
	「本夕は出席者少なく、馬場、高木、宮崎、小林、長崎、大槻夫妻數氏に過ぎなかつたが、會員諸氏にも少し熱心に出席せられむことを希望します」とあり、欠席の模様。		×	昭和15年5月号、P.90
	「最後に、高橋鐵氏は某誌に連載せられた「宣傳心理學」に關する長論文を朗讀して、批判を乞はれた。」	この号の例会報に「物價變調のために會費は高む上に會場料理店の待遇は悪くなり、不快なことが多い故」、研究会を隔月にするという告知があり(P.90)、実際に以降は隔月開催となっている。	○	昭和15年7月号、P.90
	出席情報無し。欠席の模様。		×	昭和15年9月号、P.95~96
	「高橋鐵も次に「宣傳家としてのヒトラー」と題する論文を朗讀せられ、その才氣を發揮せられた。」		○	昭和15年11月号、P.75
	出席情報あり、詳細なし。		○	昭和16年1月号、P.77~78
	フロイド賞授賞式の記念写真(P.72~73見開き)および出席者名の記載あり。高橋も出席。	昭和15年度フロイド賞授賞式と併催。	○	昭和16年3月号、P.74

表 1-2 高橋鐵入会以後の講習会例会

年	例会名	日付	開始時刻	場所（記事中表記ママ）		
昭和9年	11月例会	昭和9年11月5日	18:00~	東京精神分析學研究所		
	12月例会	昭和9年12月3日	記載なし	東京精神分析學研究所		
昭和10年	1月例会	昭和10年1月8日	夜	東京精神分析學研究所		
	2月例会	昭和10年2月4日	夜	東京精神分析學研究所		
	3月例会	昭和10年3月4日	夜	東京精神分析學研究所		
	4月例会	昭和10年4月1日	夜	東京精神分析學研究所		
	5月例会	昭和10年5月6日	夜	東京精神分析學研究所		
	6月例会	昭和10年6月3日	夜	東京精神分析學研究所		
	7月例会	昭和10年7月1日（頃）	記載なし	東京精神分析學研究所		
	◆昭和10年9、10月の講習会例会については記録なし。同時期に「精神分析と映画鑑賞					
		11月例会	昭和10年11月4日	夜	東京精神分析學研究所	
		12月例会	昭和10年12月2日	夜	東京精神分析學研究所	
昭和11年	1月例会	昭和11年1月5日	夜	東京精神分析學研究所		
	2月例会	昭和11年2月3日	夜	東京精神分析學研究所		
	3月例会	昭和11年3月2日	夜	東京精神分析學研究所		
	4月例会	昭和11年4月6日	夜	東京精神分析學研究所		
	5月例会	昭和11年5月4日	夜	東京精神分析學研究所		
	6月例会	昭和11年6月1日	夜	東京精神分析學研究所		
	7月例会	昭和11年7月6日	夜	東京精神分析學研究所		
	9月例会	昭和11年9月7日	夜	東京精神分析學研究所		
	10月例会	昭和11年10月5日	夜	東京精神分析學研究所		
		11月例会	昭和11年11月2日	夜	東京精神分析學研究所	

講習会の内容について	高橋鐵の発言、発表等	高橋鐵出席	掲載号およびページ
『フロイド全集』の「總論」第一講	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和10年1・2月号、P.111
『フロイド全集』の「總論」第二講	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和10年1・2月号、P.111
フロイド著『精神分析五講』の第三講を精読。	欠席の模様。	×	昭和10年3・4月号、P.101
フロイド著『精神分析五講』の第四講を精読。	欠席の模様。	×	昭和10年3・4月号、P.101
フロイド著『精神分析五講』の第五講を精読。	欠席の模様。	×	昭和10年5・6月号、P.97
フロイド著『精神分析要領』の第一章を精読。	欠席の模様。	×	昭和10年5・6月号、P.97
フロイド著『精神分析總論』の中の「精神分析要領」第二章を精読。	「[「地獄極楽地理學」てふ興味ある隨筆を一讀せられた。]	○	昭和10年7・8月号、P.103
フロイド著『精神分析總論』の中の「精神分析要領」第三章を精読。	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和10年7・8月号、P.104
『精神分析要領』中の第四章と第五章を精読。	欠席の模様	×	昭和10年9・10月号、P.100
の會」が行われているため、そちらで代替されたものと思われる。			
フロイド著『精神分析運動史』第一節の抑圧説、抵抗説、性欲説に関する項の精読。	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和11年1・2月号、P.93
フロイド著『精神分析運動史』第二章、青年期性欲の統制、指導に関する問題討議。	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和11年1・2月号、P.93
フロイド書籍の精読を予定するも、新年懇親会をかねて宴会となる。	「お酒にはみな強い方ではなく、高橋鐵氏が最も酒豪であると云ふことになった。」(P.102) 「食後種々の分析談が交はされた。主要な題目は初子殺し、カフェーの寺院趣味などであつた。最後に高橋氏質問者となつて各自に好きな花、色、人物などに就いての聯想聴取があつた。」(P.103)	○	昭和11年3・4月号、P.102～103
『精神分析運動史』第二章精読。	欠席の模様。	×	昭和11年3・4月号、P.103
『精神分析總論』の中の「精神分析運動史」終盤を精読。	欠席の模様。	×	昭和11年5・6月号、P.94
『精神分析運動史』最後のユング批評を精読。	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和11年5・6月号、P.94
『快不快原則を超えて』についての講話、第一章精読。	欠席の模様。	×	昭和11年7・8月号、P.89
『快不快原則を超えて』の第二章～第三章を精読。	欠席の模様。	×	昭和11年7・8月号、P.89
『快不快原則を超えて』第五章を精読。	欠席の模様。	○	昭和11年9・10月号、P.95
『快不快原則を超えて』第五章を精読。	欠席の模様。	×	昭和11年11・12月号、P.105
『快不快原則を超えて』第六章を精読。	欠席の模様。	×	昭和11年11・12月号、P.105
『快不快原則を超えて』の第6章、「ナルチスムスのリビドー性についての論述」を大槻憲二が朗読。	欠席の模様。	×	昭和12年1・2月号、P.121

年	例会名	日付	開始時刻	場所（記事中表示ママ）	
	12月例会	昭和11年12月7日	夜	東京精神分析學研究所	
昭和12年	1月例会	昭和12年1月11日	夜	東京精神分析學研究所	
	2月例会	昭和12年2月1日	夜	東京精神分析學研究所	
	3月例会	昭和12年3月1日	夜	東京精神分析學研究所	
	4月例会	昭和12年4月5日	夜	東京精神分析學研究所	
	5月例会	昭和12年5月3日	夜	東京精神分析學研究所	
	6月例会	昭和12年6月7日	夜	東京精神分析學研究所	
	7月例会	昭和12年7月5日	夜	東京精神分析學研究所	
	9月例会	昭和12年9月6日	夜	東京精神分析學研究所	
	10月例会	昭和12年10月4日	夜	東京精神分析學研究所	
	11月例会	昭和12年11月1日	記載なし	東京精神分析學研究所	
	12月例会	昭和12年12月6日	記載なし	東京精神分析學研究所	
昭和13年	1月例会	昭和13年1月3日	17:30~	本郷区眞砂町通り 「江知勝牛肉店」階上	
	2月例会	昭和13年2月7日	夜	東京精神分析學研究所	
	3月例会	昭和13年3月8日	夜	東京精神分析學研究所	
	4月例会	昭和13年4月4日	夜	東京精神分析學研究所	
	5月例会	昭和13年5月 (日付記載なし)	記載なし	池袋の中外新薬商會階上會議室	
	6月例会	昭和13年6月 (日付記載なし)	記載なし	池袋の中外新薬商會階上會議室	

講習会の内容について	高橋鐵の発言、発表等	高橋鐵出席	掲載号およびページ
『快不快原則を超えて』の第6章、「アリストファネスの話に言及している条」を大槻憲二が朗読。	欠席の模様。	×	昭和12年1・2月号、P.121
新年会を兼ねて開催。宴会のみで、フロイト書の読解は「お流れ」になったと記載(P.108)	「延島英一氏から政治上のスターシステムに就いての社會分析を試みてくれとの依頼が高橋鐵氏に對してなされたりした。」	○	昭和12年3・4月号、P.108
『快不快原則』第6章末を大槻憲二担当で精読	「また高橋氏も研究調文を朗讀せられて、相互批評が相當に峻厳であつた。」(櫻庭註：文中の「調文」は原文ママ。「論文」の誤植と推測される)	○	昭和12年3・4月号、P.108
『快不快原則を超えて』の最終章を大槻憲二担当で精読。	「その後、高橋鐵氏が婦人の服飾についての論を試みられた。」	○	昭和12年5・6月号、P.108
フロイト全集第9巻「分析戀愛論」の最初の2論文を精読。	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和12年5・6月号、P.109
『分析戀愛論』巻頭の第三論文「處女性のタブー」を精読。	「會後、高橋鐵氏は「婦人買物心理」に就いて所感を述べられ大槻氏はフィレンチーの有名な論文「現實感の發展段階」の翻譯の一部分を朗讀せられた。」	○	昭和12年7・8月号、P.101
『分析戀愛論』中の「文明適性道德と近代の神経質」を担当精読。	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和12年7・8月号、P.101
『分析戀愛論』中におけるヒステリーに関する2論文の精読	欠席の模様。	×	昭和12年9・10月号、P.112
フロイト全集第9巻収載の2論文「子供の嘘」及び「或る婦人同性愛者の心理」を精読。	欠席の模様。	×	昭和12年11・12月号、P.107
『或る婦人同性愛者の心理』の続きを精読。	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和12年11・12月号、P.107
フロイト全集第9巻『戀愛論』中の「嫉妬、妄想、同性愛に於ける二三の神経症的機制に就いて」を精読。	欠席の模様。	×	昭和13年1・2月号、P.112
『マゾヒスムス』の朗読。	欠席の模様。	×	昭和13年1・2月号、P.112
フロイト「戀愛論」中の「フェチズム」の精読	「延島氏と高橋氏との間に共產主義思想問題に就いて意見の交換があり、一同傍聽の觀を呈した。」	○	昭和13年4月号、P.6
フロイト「戀愛論」中の「ナルチスムス概論」の第一論文「治療喪失と自己戀愛」の条を精読。	出席有無については記載なく不明。(発言者のみ触れられ、参加者についての情報はなし)	○	昭和13年4月号、P.6
『分析戀愛論』中の「ナルチスムス概論」の第二論文「依憑型と自己戀慕」の精読。	「その後、高橋氏は自作『浦島になった男』(水底妄想)を、土屋秋實氏は「砂漠の花園の分析」を、延島氏は「萩原朔太郎論」を、それへに朗讀して人々の批評を乞はれた。」	○	昭和13年5月号、P.86
前回の続きおよび「理想我と自己戀慕」を精読。	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和13年5月号、P.86
フロイト全集第三卷『社會・宗教・文明』中の「集團心理と自我の分析」第一節および第二章を精読。	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和13年6月号、P.5
フロイト「集團心理と自我の分析」第三章、第四章を精読。	精読會後の茶話席で、「高橋鐵氏は得意のチャプリン論を試みられ」たとのこと。	○	昭和13年7月号、P.97

年	例会名	日付	開始時刻	場所（記事中表示ママ）	
	7月例会	昭和13年7月4日	夜	(東京精神分析学研究所の仮移転先である) 林町百五十四番地	
	9月例会	昭和13年9月5日	夜	(東京精神分析学研究所の仮移転先である) 林町百五十四番地	
	10月例会	昭和13年10月3日	夜	東京精神分析学研究所	
	11月例会	昭和13年11月7日	夜	東京精神分析学研究所	
	12月例会	昭和13年12月 (日付記載なし)	17:30～	本郷弓町「江知勝」料理店	
昭和14年	1月例会	昭和14年1月9日	夜	東京精神分析学研究所	
	2月例会	昭和14年2月6日	夜	東京精神分析学研究所	
	3月例会	昭和14年3月5日	夜	東京精神分析学研究所	
	4月例会	昭和14年4月3日	夜	東京精神分析学研究所	
	5月例会	昭和14年5月2日	夜	東京精神分析学研究所	
	6月例会	昭和14年6月5日	夜	場所記載なし。	
	7月例会	昭和14年7月3日	夜	東京精神分析学研究所	
	9月例会	昭和14年9月4日	夜	場所記載なし。	
	10月例会	昭和14年10月2日	夜	東京精神分析学研究所	
	11月例会	昭和14年11月6日	夜	東京精神分析学研究所	
	12月例会	昭和14年12月 (日付記載なし)	記載なし	本郷弓町「江知勝」料理店	
昭和15年	1月例会	昭和15年1月8日	夜	東京精神分析学研究所	
	2月例会	昭和15年2月5日	夜	東京精神分析学研究所	
	3月例会	昭和15年3月4日	記載なし	東京精神分析学研究所	
	4月例会	昭和15年4月1日	夜	記載なし	
	5月例会	昭和15年5月6日	夜	東京精神分析学研究所	

	講習会の内容について	高橋鐵の発言、発表等	高橋鐵出席	掲載号およびページ
	「集團心理と自我の分析」第五章及び第六章の精読。	欠席の模様。	×	昭和13年8月号、P.5
	「集團心理と自我の分析」第七章及び第八章の精読。	欠席の模様。	×	昭和13年10月号、P.5
	「集團心理と自我の分析」の第九章、第十章を精読。	欠席の模様。	×	昭和13年11月号、P.99~100
	「集團心理と自我の分析」の第十一章「自我の或る段階」と「第十二章「追録」を研究。	欠席の模様。	×	昭和13年12月号、P.6
	忘年会と併催。フロイド全集第三巻所収「宗教の将来」を精読	欠席の模様。	×	昭和14年1月号、P.104
	『宗教の将来』第三～第四章を精読。	出席情報のみ、詳細はなし。	○	昭和14年3月号、P.94~95
	『宗教の将来』第五章を精読。	欠席の模様	×	昭和14年3月号、P.95
	『宗教の未来』第六、七章の精読。	「出席者はいつもの顔振七名であつた。」(P.89)とのみ記載され、高橋が出席したかどうかは不明。	不明	昭和14年5月号、P.89
	『宗教の未来』第九～十章の精読。	欠席の模様。	×	昭和14年5月号、P.89~90
	「文明と不満」の第一章「大海原のやうな感情」、「第二章「宗教は幸福を與へるか」を精読。	欠席の模様。	×	昭和14年7月号、P.85~86
	「文明と不満」の第三章を精読。	欠席の模様。	×	昭和14年7月号、P.86
	「文明と不満」の第四章「文明の缺陷」を精読。	欠席の模様。	×	昭和14年8月号、P.7~8
	フロイド全集第三巻中の「文明と不満」の第五章「攻撃慾と文明」を精読。	「會後、倉橋氏は子供の性教育に就いての経験を語られ、高橋氏は叱責が条件反射となつて子供の超自我となることを主張せられ、大槻氏は全能感性格として「忠直卿行状記」を分析したものを朗讀せられた。」	○	昭和14年10月号、P.6
	「文明と不満」の第六章「エロスと死の本能との闘争」および第七章「良心の起源」を精読。	出席情報あり、詳細なし。	○	昭和14年11月号、P.80
	「文明と不満」の最後の章「餘論」を精読。	出席情報あり、詳細なし。	○	昭和15年1月号、P.76~77
	忘年会を兼ねる。フロイド全集七巻『トートムとタブー』の序文朗読と本書の成立経緯について大槻憲二から解説。	「高橋鐵氏は『オール讀物』新年號に掲げられた大作「古代の血」を掲げて出席せられ、自祝の意味にて因果物一籠を會員一同に寄贈せられた。」	○	昭和15年1月号、P.77
	『トートムとタブー』の第一章「骨肉姦の恐怖」を精読。	欠席の模様。	×	昭和15年2月号、P.7
	『トートムとタブー』の第二章第一節～第二節を精読。	出席情報あり、詳細なし。	○	昭和15年3月号、P.89
	『トートムとタブー』第二章第三節を精読。	欠席の模様。	×	昭和15年5月号、P.90
	『トートムとタブー』第二章第四節を精読。	欠席の模様。	×	昭和15年5月号、P.90
	『トートムとタブー』第三章「アニミズム、魔術及び念慮の全能」を精読。	出席情報あり、詳細なし。	○	昭和15年6月号、P.7

年	例会名	日付	開始時刻	場所（記事中表示ママ）	
	6月例会	昭和15年6月3日	夜	東京精神分析学研究所	
	7月例会	昭和15年7月1日	夜	東京精神分析学研究所	
	9月例会	昭和15年9月2日	夜	東京精神分析学研究所	
	10月例会	昭和15年10月14日	夜	東京精神分析学研究所	
	11月例会	昭和15年11月4日	夜	東京精神分析学研究所	
	12月例会	昭和15年12月 (日付記載なし)	記載なし	本郷江知勝楼	
昭和16年	1月例会	昭和16年1月13日	夜	東京精神分析学研究所	
	2月例会	昭和16年2月3日	夜	東京精神分析学研究所	

※なお、昭和9年3月の各日曜に、「公開講習会」という形で大槻憲二ら東京精神分析学研究所のメンバーが「阿佐ヶ谷掲載した「講習会例会」とは趣旨が異なり、また高橋も参加していないためここには含めていない。

	講習会の内容について	高橋鐵の発言、発表等	高橋鐵出席	掲載号およびページ
	『トータルとタブー』の第三章第四節及び第四章第一節を精読。	欠席の模様。	×	昭和15年6月号、P.90
	『トータルとタブー』第四章第二節「トータルミスムスに関する諸學説」を精読。	出席情報あり、詳細なし。	○	昭和15年9月号、P.96
	『トータルとタブー』の第四章第三節～第四節を精読。	欠席の模様。	×	昭和15年10月号、P.8
	『トータルとタブー』の第四章第六節、七節の精読。	欠席の模様。	×	昭和15年11月号、P.75
	『自我とエス』を精読。	欠席の模様。	×	昭和15年12月号、P.6
	忘年会、執筆者慰労会を兼ねて開催。	「や、遅れて出席した高橋鐵氏はまた新たに女中を口説いて酒の追加を寄贈せられた。一同上機嫌になつて上品な洒落を交わした。その一つをこゝに紹介すると、大政翼賛會宣傳部に關係してゐられる高橋氏に向つて或る人が、「大政翼賛會の一番上の人は誰ですか」と尋ねたに對し、高橋氏は「それはやはり近衛さんでせう」と答へると長尾氏は側からすかさず「コノウエはないわけだ」と洒落れば、田中虎男氏はまた横合ひから「コノウエはあるにはあるがコノウエだ」と叫んだ。」	○	昭和16年1月号、P.78
	『自我とエス』第二章「自我とエス」を精読。	「高橋鐵氏からはわざ／＼缺席の電報を頂いた。」	×	昭和16年2月号、P.8
	『自我とエス』第三章のはじめから半分を精読。	欠席の模様。	×	昭和16年3月号、P.74～75

小山 組合会館にて、精神分析をテーマに公開講座を開催している（報告記事は昭和9年4月号、P.97）が、本表に

表 1-3 高橋鐵入会以前の研究会例会

年	開催年月日	開催時刻	場所 (記事中表示ママ)	内容
昭和6年	昭和6年6月22日	記載なし	銀座晴湖	維摩經の分析的興味 佛教心理學に就いて 支那に於けるエディポスの傳説
	昭和6年9月25日	記載なし	YMCA 207 號室	天靈の文學と地靈の文學 『ウォルポール寺院』に就いて
	昭和6年10月26日	記載なし	永樂クラブ	新興建築と胎内空想 松澤病院見學所感 リヤ王の精神分析
	昭和6年11月26日	記載なし	永樂クラブ	嫉妬心に就いて 一角仙人の分析的解釋 生活權と幸福權
	昭和6年12月21日	記載なし	永樂クラブ	幻を立開く女 精神分析とシウルレアリズム
昭和7年	昭和7年1月22日	記載なし	永樂クラブ	ゴールズワージの性格創造論
	昭和7年2月22日	記載なし	永樂クラブ	ハクスリの戀愛觀 その批評
	昭和7年3月22日	記載なし	永樂クラブ	劣等感に就いて 『ナルチスとゴールドムント』の研究
	昭和7年4月25日	記載なし	永樂クラブ	『ジキール博士とハイド氏』の分析 ストレチイに就いて 或る少女の道德心と藝術心 ホルモンの話 アイデンティティの文學 その批評
	昭和7年5月25日	記載なし	永樂クラブ	エリオットの誌に就いて 社會的性格に就いて 兒童の洒落と云ひ損ひの機別
	昭和7年6月22日	記載なし	永樂クラブ	ウルフの作品 シング劇の分析解釋 身投げ救助と戀愛との心理的關係
	昭和7年9月26日	記載なし	永樂クラブ	文藝家と精神分析治療 心理的タイプより見たる東西文明 ミュンスターベルクの聯想試験
	昭和7年10月27日	記載なし	永樂クラブ	肉弾勇士の死と日本人の涅槃本能 二三の探偵的事件に關する分析的報告 ベルグソンの夢の説
	昭和7年11月26日	記載なし	萬世橋驛前アメリカン・バーカリ	徒然草第七十一段に述べられた特殊な心理作用に就いて アンドレ・モオロアに就いて 救助戀愛文學に關するその後の調査報告 リットン報告書の分析批評 『二筋道』の分析解釋
	昭和7年12月19日	記載なし	アメリカン・バーカリ	うばが餅に就いて 現存の若者宿に就いて 精神神經症の分類

	発表／発言者	確認できる出席者および人数	掲載号およびページ
	長谷川誠也	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.57
	キイソータ		
	大槻憲二		
	加藤朝鳥	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.57
	長谷川誠也		
	大槻憲二		
	大槻憲二	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.57
	大槻憲二		
	大槻憲二		
	長谷川誠也	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.57
	加藤朝鳥		
	小倉清三郎	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.57
	加藤朝鳥		
	長谷川誠也	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.57～58
	長谷川誠也	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.58
	加藤朝鳥		
	大槻憲二		
	武田忠哉	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.58
	大槻憲二	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.58
	荒川龍彦		
	田内長太郎		
	小山良修		
	加藤朝鳥		
	長谷川誠也		
	普後俊次	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.58
	廣井重一		
	大槻憲二		
	田内長太郎	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.58
	川上水夫		
	大槻憲二		
	大槻憲二	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.58
	長谷川誠也		
	田内長太郎	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.58～59
	大槻憲二		
	川上水夫		
	長谷川誠也		
	田内長太郎	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.59
	田内長太郎		
	大槻憲二		
	長谷川誠也		
	大槻憲二		
	中山太郎	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.59
	江戸川乱歩		
	大槻憲二		

年	開催年月日	開催時刻	場所 (記事中表示ママ)	内容
昭和8年	昭和8年1月20日	記載なし	アメリカン・ベーカー	ユングの聯想法 心理分析と文學批評 俱舎論中のエディポス、コムプレクスの辭句に就いて
	昭和8年2月20日	記載なし	アメリカン・ベーカー	所謂天一坊の夢に就いて 忘却想起の契機となった夢の話 民間傳承と夢、橋姫の話
	昭和8年3月20日	17:30~	萬世橋前アメリカン・ベーカー	祝祭劇及び機關誌準備経過報告 エディポス劇の翻譯について 『花咲く曠野』について アンドレ・モオロアのアドラー観 寓話の解釋に於ける夢の願望實現以前の意味
	昭和8年4月7日	夕	アメリカン・ベーカー	■祝祭劇の準備や経や報告の相談など
	昭和8年5月6日	17:30~	萬世橋驛前アメリカン・ベーカー	■祝祭劇収支報告・慰労会を併催 人相學の話 吸血願望の分析的觀察 吉村説の批評 吉村、大槻兩氏への批評 言語學への分析的興味
	昭和8年6月 (日付記載なし)	記載なし	神田萬世橋驛前アメリカン・ベーカー	精神分析昔話 榑保三郎博士と私 精神分析者となるまで 心理學と社會學
	昭和8年7月11日	17:30~	萬世橋驛前アメリカン・ベーカー	■フロイド氏と兒童心理を語る ■左翼巨頭連の轉向事件、エロ的犯罪に就いて ■金子氏の轉向心理論に就いての批評
	昭和8年9月20日	17:30~	神田萬世橋驛前アメリカン・ベーカー	藝術教育から人間教育へ 清明の象徴としての血 フェレンチの緩和法 分析治療の成功と失敗
	昭和8年10月19日	17:30~	神田萬世橋驛前アメリカン・ベーカー	■少年感化事業の経過と經驗について
	昭和8年11月14日	夜	アメリカン・ベーカー	■根岸病院の患者について ■精神病患者の治療經驗について

	発表／発言者	確認できる出席者および人数	掲載号およびページ
	田内長太郎	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.59
	荒川龍彦		
	長谷川誠也		
	大槻憲二	不明（記載なし）	昭和8年5月号（創刊号）、 P.59
	田内長太郎		
	中山太郎		
	大槻憲二	海野十三、岩倉具榮ら総計24名	昭和8年5月号（創刊号）、 P.47
	松居松翁		
	長谷川誠也		
	永田道彦		
	矢部八重吉		
	—	江戸川乱歩、松居松翁、海野十三ら総計15名	昭和8年6月号、P.110
	—	江戸川乱歩、松居松翁ら総計21名	昭和8年6月号、P.110～ 111
	吉村森三郎		
	矢部八重吉		
	大槻憲二		
	松居松翁		
	小野田幸雄	長谷川誠也ら総計21名	昭和8年7月号、P.86
	上野陽一		
	諸岡存		
	古澤平作		
	川又昇	江戸川乱歩、森下森村ら総計26名	昭和8年8月号、P.114
	高島平三郎		
	金子準二	長谷川誠也ら総計14名	昭和8年10月号、P.109
	矢部八重吉		
	霜田静志		
	長崎文治		
	大槻憲二	長谷川誠也、松居桃多郎ら総計12名	昭和8年12月号、P.102
	矢部八重吉		
	某氏夫人某女史	松居桃多郎、岩倉具榮ら総計14名	昭和8年12月号、P.102 ～103
	長谷川誠也		
	諸岡存ら数名		

第5節 『精神分析』誌上におけるその他の高橋鐵関連の言及、記事

本節では、編輯後記や会員活動の紹介記事など、本人による論文または研究会、講習会以外の『精神分析』誌上における高橋鐵に関連した情報、または高橋に関する言及を表3として挙げた。また「名映畫分析鑑賞と講演の會」および「交靈鬼懺悔」讀後感—高橋鐵氏の新しき出發を祝して—、「精神分析學界懇話會」、「雜誌維持委員制の廢止に就いて」については、以下に別掲して紹介する。

○「名映畫分析鑑賞と講演の會」について 昭和10年11・12月号、P.99~101

昭和10年10月5日に開催された「名映畫分析鑑賞と講演の會」の開催予告記事。

精神分析学の普及を図ることを目的としたこの会は、同日の13時および18時からの2回にわたり東京市麴町区内幸町の仁壽講堂にて開催され、分析映画『心の不思議』および『ブラーグの大學生』の上映及び講演を行った。当初、前掲の映画2作品のフィルムを所持する映画会社が判らない状況であったが、高橋鐵の報告により中央映画社にあることが判明し企画が実現、そこから2ヶ月あまりで開催にこぎ着けている。高橋はこのフィルム所在調査をはじめ、会当日の準備、また『心の不思議』上演にあたってはその解説・弁士を務めるなど中心メンバーの一人として参加した。この会の報告記事は昭和10年11・12月号に掲載され、「來會者晝夜兩回一千餘名。相當の盛會であつた」(P.99)、「經濟的にも僅少なから黒字に終了した」(P.101、同年研究会10月例会報告記事より)と研究所開催のイベントとしては成功であったことが伺える。

○「交靈鬼懺悔」讀後感—高橋鐵氏の新しき出發を祝して— 昭和13年1・2月号 P.89~95

会員・倉橋久雄による高橋鐵の短編小説『怪船人魚號』(昭和12年11月号)、『交靈鬼懺悔』(昭和12年11月号)の感想批評。『怪船人魚號』は、幻の人魚を求めて南太平洋に赴くドイツ人医学者ゲルハルト・コッホを主人公に、彼の「人魚捜し」に秘められた謎とその数奇な運命を描いた作品で、高橋鐵が

商業誌に発表した最初の小説である。また『交霊鬼懺悔』は、「自分は人を殺した」と訴える精神病患者・赤松天淵の告白による怪奇物で、天淵の妻で交霊術者の天姚と、愛人である女芸人・素女蝶との三角関係、そして三人の破滅を描いている。二作ともに文藝春秋社の『オール讀物』誌上に掲載されたもの。高橋の戦前最後の小説となる『太古の血』も同誌上に発表されている（昭和15年新春号）。倉橋は前掲二作の物語展開および登場人物の名前、性格付けなどを精神分析的に解釈し、高橋の中にある「母＝妖婦」像、そして「桃割れ（少女）」への嗜好を指摘、その上で二作品、特に『交霊鬼懺悔』を小説として高く評価し、「最もよりよき映畫材」・「こゝに傑作あり。」（共にP.95）と賛辞を送っている。なお、『怪船人魚號』は昭和16年に刊行された高橋の小説集『世界神秘郷』（霞ヶ関書房）に収録されている。

○オール・トーキー（“The Private World”）『白い友情』分析合評会 昭和10年11・12月号、P.68～72

東京精神分析学研究所のメンバーが昭和10年9月30日にパラマウント映画社試写室で鑑賞した米映画『白い友情』（グレゴリー・ラ・カヴァ監督）の合評会を記事にしたもの。参加者は高橋、大槻憲二・岐美、辻修、岩倉具榮、長崎文治の6名。精神病院および精神科医師を題材にした同作のリアリティを肯定的に評価し、また作品展開や登場人物の言動の精神分析的な読み解きを中心に行っている。高橋も「アメリカでは珍しい智的な作品」（P.70）と述べるなど概ね高評価を与えており、作品への意見や他の出席者への質問など活発に発言している。

○「精神分析學界懇話會」について 昭和13年3月号、P.98～100

東京精神分析學研究所の主催により、昭和13年1月30日夜に上野の料亭「揚出し」にて催された精神分析學界関係者の親睦会の模様を報告した記事。精神分析學研究者や発表メディアに対する規制・弾圧に対する対応を協議する主旨で開かれたが、検閲を憚ったためか昭和13年3月号（P.98～100）の報告記事では具体的にどのような意見が出たのか、あるいはどのような対応をとる

ことになったのかは記載されていない^(※)。出席者は大槻憲二、諸岡存、木村廉吉、富田義介、高橋鐵ら18人程で、同号口絵ページに掲載された記念写真では、高橋は写真三列目の右から二番目に写っている。発言についての詳細はなく、出席したことが確認できるのみである。

○雑誌維持委員制の廃止に就いて 昭和13年9月号巻頭（表紙から6ページ目）

東京精神分析学研究所では、主宰者の大槻をはじめ創刊時より立ち上げに関わった岩倉具榮、長谷川誠也、長崎文治、大久保眞太郎ら5名を「雑誌維持委員」とし、刊行費用の拠出など主に『精神分析』を資金面でサポートしていたが、この号にいたってそれを廃止し、新たに「文献維持委員制」を新設するとした告知。高橋は維持委員にはなかったが、この告知文内で「臨時に援助又は寄付の形式にて維持に資せられた方々には高橋鐵、廣井重一、奥本島田その他の諸氏がありました」と触れられており、資金援助もしくはなんらかの形で運営をサポートしていたものと思われる。なお、前掲の「文献維持委員制」と

表3

	掲載号およびページ	記事名	記事ジャンル	
昭和9年	昭和9年7・8月号、P.106	編輯後記	編集後記	
	昭和9年9・10月号、P.101	最近國內事實	告知文	
昭和10年	昭和10年1・2月号、P.113	編輯後記	編集後記	
昭和11年	昭和11年1月2月号、表2向(ノブルなし)	『理想の家族』出版記念會記念撮映	写真ページ	
	昭和11年1月2月号、P.98	編輯後記	編集後記	
	昭和11年3・4月号、奥付	編輯後記	編集後記	

は、各国精神分析学関係の書籍を購入する費用を一口 50 円から募り、東京精神分析学研究所の資料購入費にあてるといふもの。文献維持委員となった会員には雑誌以外の研究所刊行物を無償提供されるほか、研究所が購入した文献を閲覧する権利が与えられる旨が記載されている。なお、次号以降にこの文献維持委員となった会員名が度々発表されているが、高橋の名は見られず、委員にはなっていないものと見られる。

【第 5 節 注記】

※高橋鐵自身は昭和 41 年に著した『日本精神分析学私史』（『思想の科学・第五次』掲載（昭和 41 年 3 月、思想の科学社）の中でこの会について触れ、「しかし、この懇話会は主催者の熱意にもかかわらず、単なる顔合わせ会に終わったのである。その日の記録にもあるとおり「只今のような御時勢に対して下手な手出しをすることは甚だ危険」という空気があった。」（同書 P. 55）と振り返っている。

	掲載内容	備考
	「高橋鐵氏は日本大學心理學科卒業、性格學、廣告心理學などに興味を持ち、また日活の文藝部にも關係を持つ才人。氏は既に四月號にも執筆してゐられる。」	ここで「四月號」とあるのは、「春の自由聯想」のこと。
	「本誌前號内容に關しては、本號卷末廣告を参照ありたし。但し同廣告には生形要氏稿『トーカー居酒屋に就いて』及び高橋鐵氏稿『初戀ガイド』が洩れてゐる。兩氏原稿が遅れたためである。」	
	「高橋氏には社會分析を、奥本島田氏には生物分析を、將來着々進めて行つて頂きたい希望を切に感じます」	この号、高橋の『水に誘はれる人の精神分析』が掲載されている。
	岩倉具榮の著書『理想の家族』（マンスフィールド著作集の邦訳）の出版記念会の折に撮られた記念写真。高橋鐵も中列右より 2 番目に写っている。	同出版記念会は大阪ビル（東京市麹町区内幸町一丁目 3 番地）地階レインボーグリル広間にて。
	「本號は高水、高橋、北垣諸氏の力のこもつた論文で充實した特輯内容を示しましたが、なほ性格改造問題はこれだけで論じ盡されたわけではありません。」	同号で高橋は論文『性格改造は精神分析によつてのみ』とコラム「代表的煩悶 身の上相談分析解答見本帖」を掲載している。
	「本號には、長崎、高橋、北山、土屋、倉橋、奥本などの新進の分析者が活躍して誠に華やかな光景であります。」	

	掲載号およびページ	記事名	記事ジャンル	
	昭和11年7・8月号、P.86	最近国内事実	会員活動・業績	
昭和12年	昭和12年1・2月号、P.74	『阿部定の精神分析的診断』	広告	
	昭和12年1・2月号、P.119	最近国内事実	会員活動・業績	
	昭和12年1・2月号、P.119～120	長谷川氏還暦と出版記念会	会員活動・業績	
	昭和12年3月4月号、P.105	最近国内事実	会員活動・業績	
	昭和12年3月4月号、P.106	長崎氏フロイド賞受領祝賀会	フロイド賞贈与式	
	昭和12年5・6月号、P.108	最近国内事実	会員活動・業績	
	昭和12年7・8月号、P.100	最近国内事実	会員活動・業績	
	昭和12年9・10月号、P.111	最近国内事実	会員活動・業績	
	昭和12年9・10月号、P.112	研究所便り	会員近況	
昭和12年11・12月号、P.106	最近国内事実	会員活動・業績		

	掲載内容	備考
	<ul style="list-style-type: none"> ・『妖婦お定の精神分析』（高橋鐵、大槻憲二両氏談）が「都新聞」5月24日夕刊に掲載 ・早稲田大学精神分析学研究会春期大学（5月9日午後1時～、早稲田大学文学部教室）が開催され、そこで他の会員と共に登壇講演。（「朝から夜中まで」の題下に、人間の一日の生活の各部分が斯學の見地から如何に解釈せられるかを通俗的に語り」とのこと） ・「ハイキングの精神分析」（『トップ』6月号） ・「兩性の精神分析」（『ホームライン』7月号） ・「資本主義光線を浴びた女性のサド心理」（『メッカ』7月号） ・「川柳に描かれた児童心理の分析」（『オール女性』6月号）の掲載、活動報告 	
	『阿部定の精神分析的診断』（東京精神分析學研究所・編）の広告に、執筆者の一人として名前が掲載。執筆項目は「この無意識心理について」、「お定のサダイズム雑考」の2章。『阿部定の精神分析的診断』広告は以降も度々掲載されている。	『阿部定の精神分析的診断』は昭和12年1月に刊行されている。刊行後の高橋担当章の題名は「定の無意識的動機に就いて」、「阿部定の定イズム雑考」に変更されている。
	「広告心理學は破産した！」（誠文堂『廣告界』昭和11年11月号） 「洒落型外装物語」（誠文堂『廣告界』昭和12年1月号）の掲載報告	
	会員・長谷川誠也の『遠近精神分析觀』の「出版記念会」（昭和11年10月28日夜、於：上野山下「揚出し」）の報告記事に、出席の一人として名前が記載。特記事項はなし。120ページに掲載された同会の記念写真では、後列左端に写っている。	
	「芭蕉を哀しく切りきざむ」（俳誌『鳥柴』昭和11年12月号） 「現代娘はどんな男を望むか」（『奥の奥』昭和12年3月号） 「新媒體としての絶対映畫」（『廣告界』昭和12年3月号）の掲載報告	
	「前號既報の通り、長崎文治氏は第一回フロイド賞を受けられることになり、昭和十二年一月十五日の新年例會を兼ねて、同氏祝賀會に宛てられた。會場はいつものアメリカン・ペーカーであった。 （中略） 會後、紀念撮映をしたが、口繪第一面最下の圖が、それである。圖中前列右より、田内長太郎、大槻憲二、長崎文治、岩倉具榮、竹田浩一郎、内藤梅子、木村廉吉、霜田静志、伊藤龍朗、富田義介、梅木米吉、小山良修、小林一、高橋鐵、塚崎茂明、立川玄一郎の諸氏。（後略）」	
	「服飾品の持つ愛慾性」（『廣告の研究』昭和12年5月号） 「服飾の精神分析」（『婦人畫報』昭和12年3月増刊号） 「女性購買心理」（『廣告界』昭和12年5月号） 「戀愛觀破の秘訣」（『奥の奥』昭和12年3月号）の掲載報告	
	「買物心理の秘密」（『廣告界』昭和12年5月号） 「戀愛觀破秘訣」（『奥の奥』昭和12年3・4月号）の掲載報告	5・6月号で報告されたものと同じものと思われる。
	「少年若妻殺し」（『金』昭和12年8月号）を執筆したとの報告。	
	「高橋鐵氏の御父上は七月二十二日御死去なされました。謹んで哀悼の意を評します。」	
	『怪魚船人魚號』（文藝春秋社『オール讀物』11月号） 『精神科學に照した心の神秘』（『日の出』11月号） 『超現實派年末街』（『廣告界』11月号）の掲載情報を紹介。 ※『怪魚船人魚號』は、掲載誌でのタイトル『怪船人魚號』の誤りと思われる。	

	掲載号	記事名	記事ジャンル	
昭和13年	昭和13年1・2月号、P.89～95	『交霊鬼懺悔』讀后感—高橋鐵氏の新しき 出發を祝して	時評	
	昭和13年1・2月号、P.110	最近國內關係時事	会員活動・業績	
	昭和13年1・2月号、P.114	昭和十二年度フロイド賞論文銓衡決定	告知文	
	昭和13年3・4月号、 巻頭写真 (ノンブルなし)	精神分析學界懇話會	口絵写真	
	昭和13年4月号、 P.4	最近國內關係時事	会員活動・業績	
	昭和13年5月号、 P.85	最近國內關係時事	会員活動・業績	
	昭和13年7月号、 P.96	最近國內關係時事	会員活動・業績	
	昭和13年7月号、 P.98	研究所だより	会員近況	
	昭和13年9月号、 P.96	最近國內關係時事	会員活動・業績	
昭和13年9月号、 P.98	研究所だより	会員近報		
昭和14年	昭和14年1月号、 P.103	最近國內關係時事	会員活動・業績	
	昭和14年3月号、 P.3	Zum Andenken an de Freu d-PreisFeier (1938)	口絵写真	
	昭和14年3月号、 P.5	★フロイド賞に就いて	巻頭あいさつ	

	掲載内容	備考
	倉橋久雄による『怪船人魚號』および『交霊鬼懺悔』評。(別掲)	
	『交霊鬼懺悔』(『オール讀物』昭和12年12月号)掲載の報告あり。	
	「昭和十二年度フロイド賞論文銓衡決定 象徴構成の無意識心理規制 高橋 鐵 右は本誌本誌所載論文なれども、十二年中の執筆完成に係るを以て、銓衡の結果右の如く決定。 東京精神分析學研究所フロイド賞銓衡委員 岩倉具榮 長谷川誠也 大槻憲二」	
	「精神分析學界懇話會」の会合写真。高橋は後ろ3列目右より2番目に写っている。	昭和13年1月30日夜、上野山下の「揚出し」にて
	「浦島になつた男」(『新青年』4月号)の掲載報告	
	「支那秘譚・明笛魔曲」(『オール讀物』5月号)の掲載報告	
	「野獸園秘事」(『オール讀物』6月号)の掲載報告	
	「高橋鐵氏は『チャプリンの精神分析』に關して資料蒐集調査中の由。」	
	「怪奇・瀧夜叉憑靈」(『新青年』特別増刊) 「水人創世記」(『オール讀物』9月特大号)の掲載報告	
	「延島英一氏は『中央公論』八月號に『ゲ・ベ・ウ脱出者の手記』を掲げて甚だ好評を博し、紹介者大槻氏も大いに面目を施してられます。分析的小説家としての高橋鐵氏の位置も確立して来たやうですし、會員諸氏が追々各方面に進出せられることをお慶び申し上げます。」※文章末尾の「ず」は原文ママ	
	「輪切りの人」(『新青年』昭和13年11月号) 「英雄は死なず物語」(『奇譚』創刊号/博文館) 「人生レイアウト」(『廣告界』昭和13年10月号以降連載) 「文学精神病院」(『文学建設』創刊号) 「季節の心理」(『廣告界』昭和13年12月号) 「犯罪としての廣告」(現代新聞批判 11月1日号) 「時局を喰ふ廣告」(現代新聞批判 11月15日号) 「色魔としての廣告」(現代新聞批判 12月1日号) 「酔拂いカタログ帖」(『現代』昭和10年12月号)の掲載報告	
	第三回フロイド賞贈与式の写真。高橋は後列左端から5番目。	
	「フロイド賞は、本研究所から、その機關誌『精神分析』誌上に發表せられた優秀な論文に對して毎年末に贈與せられるもので、斯學に深甚の理解を有せられる岩倉具榮公の發案に出づる。(中略) 第一回即ち昭和十一年度の受賞者は長崎文治氏、論文は『母性の長子憎悪心理の研究』であつた。第二回(十二年度分)は高橋鐵氏の『象徴構成の無意識心理規制』であつた。第三回(十三年度分)は北山隆氏の『夏目漱石の精神分析』で、この論文は一書に纏められて、先頃公刊せられた。長崎氏は物理療法の人で、目下壓戟療法なるものを創案實施して分析學をも應用してゐられるやうである。高橋鐵氏は實驗心理學畑の人であるが、文才豊富で、目下盛んに分析學應用の小説を『オール讀物』などに發表しつつある。(後略)」	

	掲載号	記事名	記事ジャンル	
	昭和14年3月号、 P.109	編集後記	編集後記	
	昭和14年9月号、 P.95	編集後記	編集後記	
昭和15年	昭和15年1月号、 P.75	最近国内関係時事	会員活動・業績	
	昭和15年1月号、 P.94	編集後記	編集後記	
	昭和15年5月号、 P.89	国内関係時事	会員活動・業績	
	昭和15年9月号、 P.96	研究所だより	会員近況	

	掲載内容	備考
	<p>「最近の特別誌友加盟者諸君の御芳名を左記御支援の御好意を謝します。 (中略) ▲神田 區 長尾忠氏 (高橋鐵氏紹介)」</p>	<p>特別誌友(『精神分析』購読会員)の一人を高橋が紹介したものである。</p>
	<p>「高橋鐵氏は久しぶりの執筆で讀者諸氏はなつかしく思はれるでせう。」</p>	<p>この号、高橋の『精神病患者を描いた文學』が掲載されている。</p>
	<p>「ウインザー公の精神分析」(『科學知識』11月号) 「古代の血」(『オール讀物』新年号) の掲載報告 なお、「古代の血」については、「アイヌ族と大和民族の闘争を背景とし、戀愛問題を取り扱ひ、作者自身の自己分析を寓したるものと云ふ。」と紹介がついている。</p>	
	<p>「始めての執筆者は宮崎正路氏でありますが高橋鐵氏の後輩としてその教導を受けて來られた方です。」</p>	
	<p>「宣傳心理學」(『廣告界』)3月号の掲載報告</p>	
	<p>「高橋鐵氏は精動本部の宣傳係員となられた。」</p>	

第6節 本稿資料の総括と位置付け

○本稿資料の総括

これまでの資料に見られるように、高橋鐵がそのキャリアの前半部分を過ごした戦前期において、雑誌『精神分析』はじめ東京精神分析学研究所との関わりは非常に深いものであった。本稿の総括を兼ねて、まず前節までの資料から判明する高橋の東京精神分析学研究所入所時期、そしてこの時期における彼の活動のおおまかな流れについて触れていくこととする。

高橋鐵は昭和8年12月に開催された研究所の研究会（12月例会）に「新來者」として参加（第4節表1参照）しており、「日本大學心理學科出身、（従つて下山善高氏の先輩）の高橋鐵氏立つて、氏の性格學や商業心理學の方面から、精神分析學に興味を持つに至つた所以を語られた。」と紹介されている。また翌昭和9年2月号に掲載された研究会1月例会報告記事（同）では、高橋が「『喧嘩の効用』論」なる座談を披露して場をわかせたことが記されており、同号に掲載されている「本研究所關係者名簿」にも高橋鐵が所員として記載されているため、高橋の入所時期、少なくとも研究所活動への参加メンバーとして認知されたのは昭和8年12月であることが確認できる。

以降、昭和9年4月号掲載の詩『春の自由聯想』（第3節参照）を皮切りに多数の論文、エッセイ等を『精神分析』誌上に発表し、また研究所の研究会、講習会に複数回参加して次第に有力なメンバーとなつていった。その過程と誌上に見る高橋の作品、また研究会等における発言の詳細、そして高橋を取り上げた『精神分析』内の記事詳細については、第3節、また第4節および第5節の表の通りである。

全体の活動を俯瞰すれば、高橋が誌上に掲載した作品については『性風俗の檢閲に就いて當局に訴ふ』、『同性愛挾別録』などの論考や「黄表紙鐵輔」名義による性愛悩み相談的読み物記事『身の上相談分析解答見本帖』など、後に性風俗研究の分野で名を顕していく彼の姿を思わせるものが見られることは勿論であるが、同時に『精神分析に依る廣告心理學の革命』や『「流行現象」の無意識的意圖』など、当時高橋が深く関わっていた広告・宣伝業界、今日でいう消費者心理マーケティングを題材にした論文も見ることができ、その内容は非

常に多岐にわたっている。同時に、第3節に掲げた『象徴形成の無意識心理機制』梗概でも述べた通り、高橋鐵が『精神分析』誌上に発表した論文の多くは、一見「論文」の形式を取りつつも途中でエッセイ、コラム的な内容に転じる、あるいは論旨展開や考証よりも類例の列挙に終始する傾向が見られ、確かに戦後の高橋鐵につながりやすいものは多いが、論文として当時の精神分析学の研究動向に影響を与えるものを残してはいない。その意味で、本稿筆者としては一般に高橋鐵の経歴を語る際に名が挙げられることの多い上記『象徴形成の無意識心理機制』や、『性風俗の検閲に就いて當局に訴ふ』よりも、むしろ小説的な構成上の工夫を凝らした『賭博の心理』のような社会論もの、あるいは『身の上相談分析解答見本帖』など当初からコラム的な読物として書かれた作品の方に、戦後にベストセラーを連発することになる“作家・高橋鐵”の本来の力量が伺えるように思われる。

昭和14年1月号掲載の「国内關係時事」にメディア批評紙『現代新聞批判』や『廣告界』への寄稿報告があることから見ても、同時期の高橋は決して「性文化研究」のみに自らの立ち位置を限定していたわけではないようだ。

高橋が後年書く事になる自伝的エッセイ等ではこのあたりの経緯がぼかされ、あたかも「精神分析、そして性研究への一念」が東京精神分析学研究所への入所を決意させたかのように回顧されているものがある^(※1)。無論、前掲した掲載論文の内容をみれば性に関する文化知識への関心・興味が当時から浅からぬものであったことは明らかであるが、この『現代新聞批評』や『廣告界』における活動、そして本節冒頭で引用したとおり、高橋は東京精神分析学研究所への入会時にその動機を「性格學や商業心理學の方面から、精神分析學に興味を持つに至つた」と語っていることなどから見て、彼がこの道に進むことになった直接的な動機は、学生時代から関わり、戦前～戦中を通じてたつきの路とした広告・宣伝業への応用やスキル向上の意味合いが濃いものであったと推測できるのではないか。いずれにせよ、高橋自身の伝記が語るよりも、実際の経緯と動機は現実と理想の入り交じった、より混沌としたものだった見るべきであろう。

なお、彼は雑誌『あまとりあ』の最終巻（第五卷第八号、昭和30年7月1

日発行)では自身の性研究への傾倒について触れた上で、

そのために、実をいうと、私は、今までの一生を棒にふるってしまった感がある。

昔は、随分、社会心理学的研究も発表したものだつた。特に流行の分析や、輿論・宣伝の心理については数冊の著書になるだろう。それ旧師大槻憲二先生からも、「社会心理学」ソシオ・アナリゼを樹てるようにと私を特に頼みにされていた。

(同書 P.49)

と東京精神分析学研究所時代の活動について振り返っており、高橋本人も(性研究に限らない、より広範な)社会心理研究に自身の出発点があると認識していたことを伺わせている。

高橋にとって、東京精神分析学研究所および『精神分析』で活動した昭和8年末から昭和15年末は、26歳から33歳と青年期の後半、また彼自身のワーク・キャリアが本格的に動きはじめた時期にあたる。本稿で掲げた東京精神分析学研究所の研究会、講習会における彼の活動、あるいはその他記事における情報からも、昭和9年～11年にかけて研究所中心の活動を行い、昭和12年以降は他雑誌、新聞等にも多くのコラム、論考記事を並行して発表しはじめ、昭和15年に「大本営精動本部」^(※2)に雇用されるなど、徐々にその活動の幅を広げていった経過が読み取れる。この時期は高橋鐵の作家業、広告宣伝業が本格的に開始され多くの雑誌掲載、そして単行本刊行がなされた「最初の全盛期」とも言うべき時期であった。また後年、研究所の同窓である霜田静志^(※3)が高橋が中心メンバーとなった性科学研究誌『あまとりあ』や『人間探求』に複数回の寄稿をし、また高橋が昭和21年7月22日から24日の三日間、東京・後楽園で開催した「ミス日本選抜会」のイベントでも、同じく研究所メンバーの精神科医・式場隆三郎が審査員として参加する^(※4)など、この時期に東京精神分析学研究所および『精神分析』誌上の活動を通じて得た知識、人脈は、後の高橋の活動に大きく活かされている。また、高橋は自作小説や論考の多くを研究所で開かれた研究会、講習会で発表して批評を求めたり、

あるいはそこでの座談が活かされていると思われる作品を後に発表^(※5)するなど、研究所、そして『精神分析』が彼の同時代の創作活動に寄与した面も少なくはない。

昭和13年後半以降は極端に論文寄稿が少なくなり、昭和14年9月号の『精神病者を描いた文學』以降は論文を掲載していない。おそらく前述の他誌での執筆活動や、「大本営精動本部」等研究所以外の仕事に比重を移したためと思われるが、その一方で研究会には続けて参加していた（それでも入会当初から中期と比較して、報告記事で取り上げられる機会は減っているが）ことが判る。（第4節表1-1参照）。

これらの東京精神分析学研究所活動の終盤から戦中の「大本営精動本部」勤務時期の高橋鐵の活動については、他資料の調査を進めていく事でより具体的な関連が論じられるものと思われ、今後の課題としたい。

○おわりに

以上、高橋鐵と東京精神分析学研究所、そして『精神分析』との関連を示す資料の提示および関連調査についてまとめてきた。本稿「はじめに」で述べたように、高橋については戦後の活動ぶりがあまりにも強烈であったためか、今日における評価は「性文化研究者」あるいは「性解放の闘士」的側面に偏り、彼の戦前の活動についてはほぼ忘れ去られたに等しい状況であると言える^(※6)。これは無論、戦後の彼自身が自らの役割を「性科学者」「性解放の闘士」と捉え、また対外的にもそうした人物像（“キャラクターづけ”と言っても良いかもしれない）をよるおっていったことも無縁ではないだろう。また、戦後の高橋と大槻憲二の「絶縁」^(※7)も、彼自身の伝記や言及からその前半生の実態を探る事を一層難しくしている。

しかし、本稿資料において取り上げたのは、まだ彼がそうした「性科学者」たる以前、「性解放の闘士」として当局との裁判闘争を繰り広げる以前の姿である。言い換えれば「まだ“何者になりきってもいない”高橋鐵」であろう。激しい筆致で当局の検閲体制を批判する一方でパロディ・コラムも手がけ、映画・流行・広告等幅広いジャンルについて持論を披瀝し、第二回フロイド賞を

受賞。多くの雑誌にコラムや小説を掲載するなど華々しい活動をする傍ら、研究会や講習会にはまめに顔を出して常に座談の中心になるなど、『精神分析』誌上における高橋鐵の“顔”は極めて多種多様なものであった。

そこには後年見られるような気性の激しさや高橋独特の一そして毀誉褒貶の元ともなった一クセのある性格が時折顔を覗かせる反面、自身の知識や活動の場を広げていくことを楽しむ若さと柔軟さ（要領の良さ、といっても良いかもしれないが）も同時に伺うことができるのではないだろうか。昭和13年11月号に掲載された例会報告記事は、高橋が江戸期の才人・平賀源内に強い興味を持っていることに触れた上で、次のように評している。

彼（櫻庭註：平賀源内）は詩的な山師と云はれ、エレキや火浣布を發明したり「神靈矢口波」の劇を書いたり、多方面の鬼才であつたが、さうして反逆精神の内に一生を終へた人であつたが、さう云へば高橋氏にもさう云ふところがあり、高橋氏の源内への同一化も問題となつた。^(※8)

無論、高橋鐵と平賀源内では今日的な評価も活動内容も大きく異なるが、当時の高橋には前掲記事執筆者に「さう云へば高橋氏にもさう云ふところがある」と思わせるだけの多才ぶりと覇気とを合わせ持っていたのであろう。個人的な感想にはなるが、筆者はそこに高橋の人間性の一面と別の可能性—ひょっとしたら、“性解放の闘士”にはならなかったかもしれない—を感じるのである。

もとい、今後はこの『精神分析』に掲載報告のある同時期の他誌における高橋の活動、また彼が戦後に主宰した「日本生活心理学会」およびその刊行物に関する調査をさらに進めながら、「何者にもなりきっていなかった」高橋鐵を性文化研究者、性解放の闘士へと変えていった（あるいは彼がその道を選んだ）時代背景を明らかにする作業を進めていきたいと考える。そのための一歩として、本稿資料で取り上げた『精神分析』を精査することが、高橋鐵自身によって書かれた自伝からは読み取りがたい、また敢て“省かれた”ものも含めた彼の個人史と活動、そしてその背景を知る上で重要であると考えられる。

その検証の積み重ねを続けることで、高橋鐵の本当の意味での“全体像”と

彼が昭和の性メディアにおいて演じた役割を研究しつつ、彼を「性文化研究者」そして「性解放の闘士」の道へと向かわせた。昭和という時代の性意識を明らかにしていきたい。

【第6節注記】

- ※1 「わが性探求の昭和史」（『現代の眼』5月号、現代評論社）など。また5節注記にて先掲の『日本精神分析学私史』では、自身が青少年期から性と社会に対する疑問を抱え、大学で学んだ意識心理学もその解明の手立てにならなかった事が、フロイト精神分析学を扱う東京精神分析学研究所に入会した契機である旨が記されている。
- ※2 昭和12年8月24日に閣議決定され、組織作りが進められた（昭和15年4月16日に改組）「国民精神総動員機構」の運動本部のことか。この組織と高橋の所属有無については未詳のこと多く、今後の調査課題としたい。
- ※3 明治23年埼玉県生まれ。東京美術師範学校卒業後、美術教育に携り、後にA・S・ニールの影響から自由教育と精神分析の研究に入り、東京精神分析学研究所に入所。戦後は多摩美術大学教授、また児童教育研究者として井荻児童研究所長をつとめた。昭和48年没。戦後も高橋と交流を持ち続け、高橋が深く関与した性文化研究誌『人間探求』に『最も新しい性教育—幼児を対象とした—』（昭和25年6月）、同じく『あまとりあ』に『性教育講座』（昭和27年4月～）などを寄稿している。
- ※4 式場隆三郎は昭和12年6月の研究会に初参加。以後東京精神分析学研究所を通じてと関わりを持ち続けていたと見られ、本文中のミス日本選抜会では「知能検査」を担当している（高橋は“情操検査”を担当）。
- ※5 第4節掲載の表1-1および1-2に掲げたように、高橋は研究会および講習会の席上で、自作の『精神分析』発表論文、また他誌掲載の小説を発表して批評を求めている。（昭和12年11月の研究会で『交霊鬼懺悔』、昭和14年12月の講習会で『太古の血』を朗読。詳細は第4節表1を参照）。また、昭和17年7月に刊行した短編小説集『南方神秘郷』（東葉

社)で、『神聖植物』という幻覚サボテンによる無意識の表出をテーマにした小説を発表しているが、これは昭和10年11月の研究会における早稲田大学実験心理学教室の戸川行男による「メスカリン(さぼてん様の同名植物よりとれる薬品)麻酔液注射に因る反応としての幻覚実験の報告」を題材の一つとしたとも考えられる。

- ※6 平成13年に光文社から刊行された『人魚の血 異形コレクション綺賓館4』(光カッパ・ノベルス)に高橋が昭和12年に執筆した短編小説『怪船人魚號』が収録されるなど、一部近年刊行の書籍で紹介されることもあるが、いずれも些少に留まる。
- ※7 第1節でも触れたように、高橋は昭和23年7月刊行の『性科学界機関誌』上に「狂つた大槻憲二氏へ」を掲載し大槻との絶縁を宣言しており、その後東京精神分析学研究所と関わりをもった形跡は見られない。ただし、鈴木敏文は高橋が後年「大槻さんは立派な人」、「大槻さんが病状に伏すようになったら、私はとんでゆくよ」といった発言をしていたことを紹介(『性の伝道者 高橋鐵』P.76~77)し、大槻との和解をひそかに望んでいたと述べている。また齊藤夜居は『悩まざりし人ありや—評伝 高橋鐵—』(太平書屋、昭和55年)で次のようなエピソードを紹介している。

私はこの論争に興味をもって、事件後十四年たった昭和三十八年のある晩、高橋鐵と対話中、この論争にふれると、彼はかなり酩酊状態だったが、くわっと目を見ひらき、強迫観念が生んだ幻影におびえるかのように、がばと床の上に土下座して、「先生、高橋はけっして先生のお顔に泥を塗るようなことをした覚えはございません」といって深か深か頭を垂れサメザメと泣いた。高橋鐵は、大槻憲二と私の区別がつかなくなっていたのである。

(同書 P.34~36)

こうした高橋の言動から、彼が絶縁を経てなお大槻に対する敬愛の念を完全に捨ててはいなかったこと、また復縁の機会を望んでいたことが

伺える。

- ※8 第4節表1参照。引用文中の「神靈矢口波」は本文ママ。「神靈矢口渡」の誤植であると思われる。

【参考文献】

『精神分析〔戦前編〕解説・総目次・索引』（不二出版、平成20年6月）

『日本への精神分析の導入における大槻憲二の役割—雑誌「精神分析」とその協力者・矢部八重吉を中心に—』（安齊順子、明海大学教養論文集、平成12年12月）

『性の伝道者 高橋鐵』（鈴木敏文、河出書房新社、平成5年11月）

『新文芸読本 高橋鐵』（河出書房新社、平成5年12月）

『悩まざりし人ありや—評伝 高橋 鐵』（齊藤夜居、太平洋書屋、昭和55年8月）